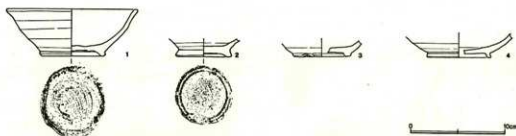


- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土 (ロームを含む)
- 4 暗褐色土 (ロームブロックを含む)
- 5 褐色土
- 6 暗褐色土 (2より黄色い)
- 7 褐色土 (ロームブロックを含む)
- 8 暗褐色土
- 9 黒褐色土

- 1 暗褐色土 (焼土混り)
- 2 黒褐色土 (焼土混り)
- 3 褐色土
- 4 焼土ブロック
- 5 粘土及び焼土
- 6 粘土 (焼土混り)
- 7 黒褐色土
- 8 黒褐色土 (ロームブロック混り)

第33図 沼下13号住居跡実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	3	底径 6.2	体部は丸味をもって緩やかに立上がる。高台は低く、端面不整形・丸棒状の圧痕を残す。	水挽き整形、底部回転糸切り、高台部は接合痕を良く残す。細砂粒・酸化炭焼成、橙褐色。	底部30%残覆土
灰釉碗	4	底径 6.6	体部外傾し、内湾気味に立上がる。底部平底、高台薄く低く、八字状に立つ。端部は稜をもち、端面内向。丁寧な作り。	水挽き整形、底部回転寛削り、高台は付け高台、胎土淡灰色・黒色微砂粒を含み、内面に淡緑色の釉を厚くかけ、体部に薄くハケぬり。	底部45%残覆土 清No.1と接合



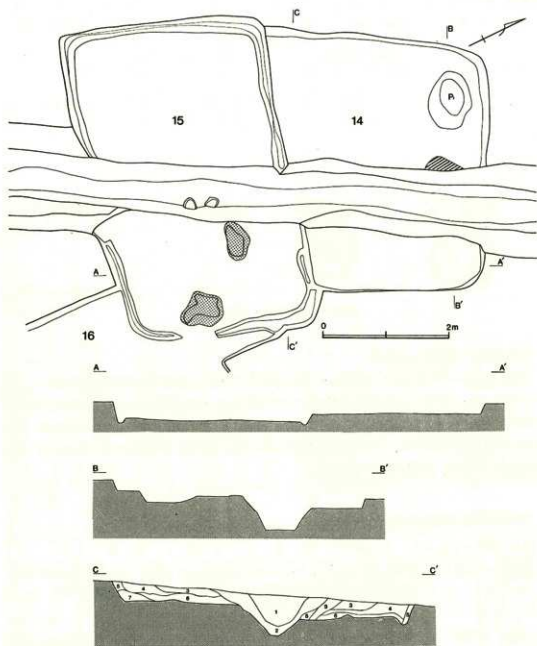
第34図 13号住居跡出土遺物実測図

14号住居跡 (第35図・図版11)

発掘区南側の一群中にある。中央部を1号溝が縦断している。本跡は15号住居跡の覆土を切ってつくられている。大きさは4.05×3.49 (推定) mのやや隅の丸い方形を呈するものと思われる。主軸の方向はN-31°-E。竈は北壁にあってと思われ、一部粘土混りの焼土の堆積した場所がある。ピットは一カ所確認されており、これは貯蔵穴と考えられよう。遺物は、全て覆土中からの出土で、土師器甕破片・坏破片、須恵器坏破片等がある。

14号住居跡出土遺物 (第36図・図版25)

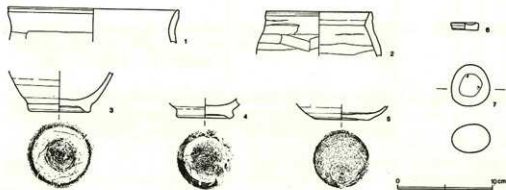
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 18.0	肩部はあまり強らず、やや内傾し、緩やかに括れて口縁部は直立気味に外反し、端部外面に凹縁を持つ。	口縁部横ナデ、肩部以下横寛削り、器面剥離、細砂粒、淡褐色。	口縁部12%残覆土
台付甕	2	口径 11.0	肩部は丸味を帯びて緩やかに内傾し、やや括れて頸部は直立し、内面に稜を持って口縁部は直立気味に外傾し外面に凹縁を持つ。器壁は厚い。	口縁部横ナデ、肩部横寛削り、頸部にも削りが及ぶ。内面寛ナデ、口縁・頸部に輪痕を残す。加熱の為、内外面に亀裂あり、細砂粒、暗赤褐色、口縁内面煤付着。	口縁部15%残覆土
坏	3	底径 6.8	器壁厚い。体部は屈曲して直立に近く外傾して立上がる。高台は厚く、直立し端面は丸い。	水挽き整形、体部に細かいろくろ目を残す。底部回転糸切り、ろくろナデを施す。微・細砂粒、半酸化炭焼成、淡褐色・淡灰褐色。	体・底部ほぼ完存 No.2



- | | |
|----------------|---------------------|
| 1 黒褐色土 | 6 暗褐色土 (ロームブロックを含む) |
| 2 黒褐色土 (1より黒い) | 7 黒褐色土 |
| 3 暗褐色土 | 8 褐色土 (粘土を含む) |
| 4 黒褐色土 | 9 焼土 |
| 5 褐色土 | |

第35図 沼下14・15号住居跡実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	4	底径 6.0	底部厚く平底状。体部は外傾気味に立上がる。高台は厚くハの字状に立ち、端面は丸味を帯び、外向する。	水挽き整形、底部回転糸切り、内面に高台接合痕を残す。微・細砂粒、胎土淡橙褐色・暗赤褐色、酸化炎焼成。	底部のみ №1
須恵坏	5	底径 5.9	底部は上げ底。体部は稜を持って立上がり、内湾気味になり、器壁は薄い。	水挽き整形、底部内面にろくろ目を残す。細砂粒、灰色。	底部のみ 焼成良好 覆土
蓋	6	鉦径 2.9	中央部より周囲の方が高い宝珠状を呈する。	ろくろナデ整形。接合時についた糸切り痕が残る。胎土淡褐色・器表灰色、細砂粒、軟質	鉦部のみ 覆土
磨石	7	長さ 4.4 幅 4.0 厚さ 3.0	周辺をやや磨って使用している痕跡がある。		花崗岩質



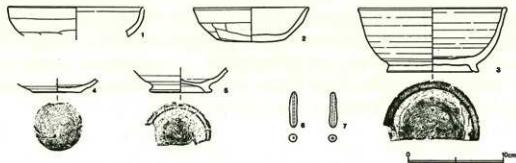
第36図 14号住居跡出土遺物実測図

15号住居跡（第35図・図版11）

発掘区南側の一群中にある。14・16号住居跡と切合っている。又、本跡は1号溝によって中央部が切られている。大きさは5.06×3.25mの、やや歪んだ長方形を呈する。主軸の方向はN-106°-E（長軸）。壁高は深い部分で25cmを測る。床面はほぼ平坦で東壁際と中央寄りの2カ所に焼土ブロックが堆積しており、東壁中央部分に壁溝が切れた場所があり、この部分に竈が存在した可能性がある。壁溝は北壁の一部と東壁の一部を除いてほぼ全周している。ピット等の付属施設はない。遺物は覆土中から土師器坏破片、須恵質碗、坏、土鍾2点等が出土している。

15号住居跡出土土遺物 (第37図・図版25)

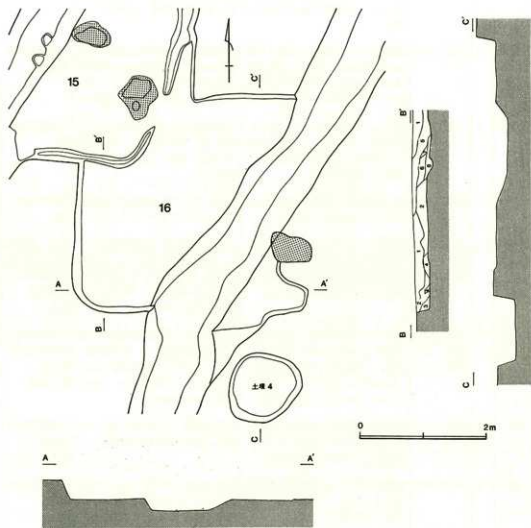
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師坏	1	口径 14.0 底径 12.0 残高 3.1	器壁は厚く、丸味を持った底部からやや稜を持って緩やかに立上がり、口縁部は外傾気味に直立する。	内面・口縁部目の荒い横ナデ、体部寛ナデ、底部寛削り、微・細砂粒、赤褐色。	口縁部20%残覆土
坏	2	口径 12.0 底径 7.1 器高 3.6	器壁は厚い、扁平な底部から体部は稜を持って外傾し、口縁部は外面に稜を持ち、外観やや立ち気味になる。	口縁部横ナデ、内面立上がり部分目の荒い横ナデ、体部横削り、底部寛削り、微・細砂粒、暗茶褐色、各部に黒底有。	口縁部30%、底部95%残覆土
埴	3	口径 15.5 底径 9.2 器高 6.7	器壁は厚い、底部は平底状、体部は稜を持って内湾気味に立上がり、口縁部は外傾気味に直立し、端部で肥厚し、端面は扁平でやや内向する。高台は厚くハの字状に立ち、端部に稜を持ち、端面は内向する。	水挽き整形、底部回転糸切り、高台接合後、周辺部寛ナデ、口縁部・内面横ナデ、体部内面にろくろ目を残す。微・細砂粒、白色砂粒を含む。内面・底部紫褐色・外面灰色・口縁部濃灰色、丁寧な作り。	口縁部8% 底部60%残覆土
須恵坏	4	底径 5.0	底部やや上げ底、体部は鈍く稜を持って屈曲して緩く内湾気味に立上がる。	水挽き整形、底部回転糸切り、底部にろくろ目を残す。微・細砂粒・白色砂粒を含む。濃青灰色。	底部のみ残焼成良好覆土
坏	5	底径 6.1	底部上げ底、体部は強く屈曲して外傾して立上がる、高台はやや高く強く外反し、端面は凹面になる。	水挽き整形、底部回転糸切り、底部にろくろ目を残す。微・細砂粒白色砂粒を含む、濃青灰色。	底部55%残焼成良好覆土
土 錘	6	長さ 3.7 径 0.8	不整長楕円形 淡灰色 表面平滑		覆土、完存
土 錘	7	長さ 3.7 径 0.8	不整長楕円形 橙褐色 土師質 表面剝離		覆土、一端を欠く



第37図 15号住居跡出土土遺物実測図

16号住居跡 (第38図・図版11)

発掘区の南側の一群中にある。15号住居跡と切合っている。5号溝によって中央部を切られており、残存状態は悪い。大きさは3.76×3.48mの隅の丸い方形プランを呈する。壁高は南壁側で25cmを測る。床面はほぼ平坦で、東壁南寄りに焼土の堆積と竈の袖の残存と考えられる地山の張り出し部分があり、ここに竈があったものと思われる。ピット等の付属施設は検出できなかった。遺物は主に覆土中から土師器甕・須恵器坏・碗・皿等が出土しており、墨書土器破片も出土している。

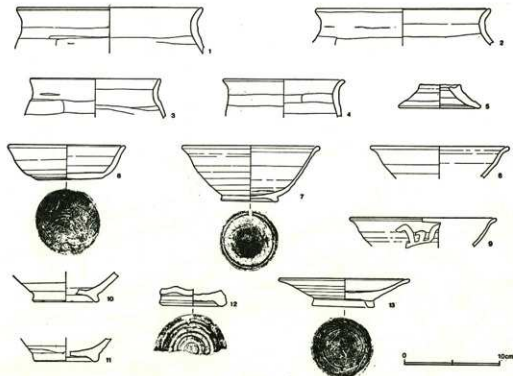


- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 黒褐色土 | 5 暗褐色土 (2よりやや黄色い) |
| 2 暗褐色土 | 6 暗褐色土 |
| 3 褐色土 (ローム含む) | 7 褐色土 |
| 4 褐色土 (焼土粒子多量に含む) | 8 暗褐色土 |

第38図 沼下16号住居跡実測図

16号住居跡出土遺物 (第39図・図版25)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 19.5	器壁は厚い。内傾する肩部から稜を持って括れ、頸部は直立し、口縁部は外反し、端部は丸味をもち、外面に沈線が走る。	口縁部目の荒い横ナデ、肩部横篋削り、内面篋ナデ、微・細砂粒、雲母が多い、赤褐色・外面煤少量付着。	口縁部14%残覆土
甕	2	口径 18.2	胴の張る器形、強く内傾する肩部から緩やかに括れて頸部は直立気味になり、口縁部は短く外反し、厚い。	口縁部目の荒い横ナデ、肩部外面横篋削り、内面篋ナデ、微・細砂粒、赤褐色・肩部一部黒色。	口縁部11%残覆土
台付甕	3	口径 13.6	器壁は薄い。直線状に内傾する肩部から稜を持って括れ、頸部は直立し、口縁部でやや稜を持って外傾し、端部をややつまみ上げる。	口縁部横ナデ、肩部横篋削り、内面木口状工具使用横方向ナデ、微・細砂粒、淡褐色・頸部上半(淡暗褐色)～外面(黒色)煤付着。	口縁部15%残覆土
台付甕	4	口径 12.5	直立し、やや内傾する肩部から、稜を持って若干括れ、頸部は肥厚して直立し、口縁部は稜を持って外反し、端部は厚い。	口縁部横ナデ、肩部横篋削り、内面篋ナデ、微・細砂粒、内面肩部あばた状に剥落、茶褐色・外面肩部煤付着。	口縁部11%残覆土
台付甕	5	脚部径 8.6	脚は低く厚い、底部から外反し、屈曲して更に外反して端部は丸い。	脚部横ナデ、微・細砂粒・淡褐色	脚部23%残覆土
須恵坏	6	口径 12.0 底径 7.2 器高 3.6	器壁厚く、丸味が強い。平底の底部から緩やかに屈曲して立上がり、体部内湾気味に、口縁外反し、端部をつまみ、端部外向する。	ろくろナデ整形、底部回転糸切り後、周辺部手持ち篋削り。口縁部つまむ。丁寧なつくり。鉄分を含み、褐色の斑点あり。灰色。口縁端部内面やや磨滅。	完形、底部内面に「十」印擦痕あり。焼成良好覆土
坏	7	口径 14.3 底径 5.9 器高 5.8	器壁薄い。底部平底。体部は内湾気味に立上がり、あまり張らず、外傾し、口縁やや外反し、端部をつまみ出し、玉縁となる。高台低くハの字状に立ち、端部は回面。	水挽き整形、底部回転糸切り、高台接合後周辺横ナデ、体部外面にろくろ目を残す。底部内面に重ね焼き痕あり、白色砂粒多い。胎土淡褐色・器面暗灰色。	口縁部58%、底部100%残焼成良好覆土 №1床面
坏	8	口径 14.3	器壁薄い、体部外傾気味に立上がり、屈曲して立ち気味になり、口縁外反し、端部をつまみ出す。	水挽き整形、石英質砕片含む。赤褐色、器面あばた状に剥離。	口縁部13%残焼成良好覆土
坏	9	口径 15.2	器壁非常に薄い。口縁若干内湾気味に立上がり、口縁部外反し、端部をつまみ出す。	水挽き整形、鉄分多く含む、半還元炎焼成・胎土暗褐色、器面淡灰色・表面淡茶褐色、墨書「爪」有。	口縁部22%残焼成良好覆土
坏	10	底径 6.8	器壁厚い。体部屈曲して外傾する。底部上げ底、高台ハ字状に開き端部は丸い。端部外向。	水挽き整形、底部回転糸切り、高台接合後、丁寧なナデ、微・細砂粒・鉄分多く含む、灰色、軟質。	底部40%残覆土
坏	11	底径 7.0	器壁薄い。底部平底、体部外傾して立上がる。高台分厚く、直立し、端部は丸味を帯びる。	水挽き整形、底部回転糸切り(?)高台接合後、ろくろナデ、細砂粒・白色砂粒含む、半還元炎焼成	底部45%残覆土

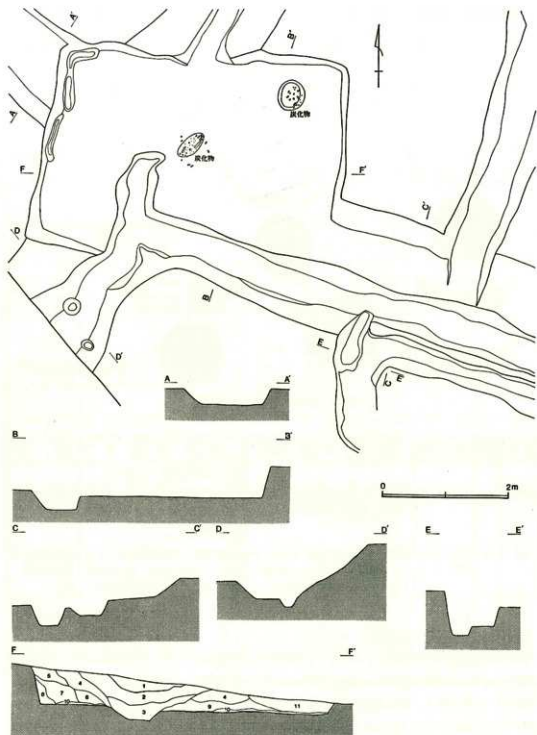


第39図 16号住居跡出土遺物実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	12	底径 6.8	器壁厚い。底部平底。高台厚く高く直立、端面に線を持つ。	胎土・底部橙褐色・外面灰色。 底部ろくろナデ整形、微・細砂粒 胎土・底部橙褐色・外面紫褐色、 酸化炎焼成。	底部50% No. 2
皿	13	口径 13.6 底径 6.4	底部厚い。体部外傾して立上がり、口縁部やや外反し、端部をややつまむ。高台部を欠失する。	水挽き整形、底部回転糸切り、内面にろくろ目を残す。微・細砂粒多い、胎土淡灰色・器面暗灰色。	底部完存・口縁部24%残覆土

17号住居跡 (第40図・図版12)

発掘区の南側の一群中にある。1・2・3号溝によって切られており、残存状態は悪い。大きさは4.85×3.35mの長方形を呈する。主軸の方向はN-2°-E(推定)。壁高は深い西壁で57cmを測る。床面はほぼ平坦である。竈は北壁中央部にあったと思われるが、残っていない。層序中に、床面上5cm程の厚みで細かい炭を含む黒色土が堆積しており、殊に、中央部及び、北東隅寄りのピット中に炭化物、焼土が集中していた。これらは一応、炉跡と考えられる。壁溝は西壁際にやや認められるが、全周しない。遺物は床面から須恵器坏、覆土中から土師器甕・坏、須恵器蓋、甕、灰釉長頸瓶、釉の羽口破片が出土している。

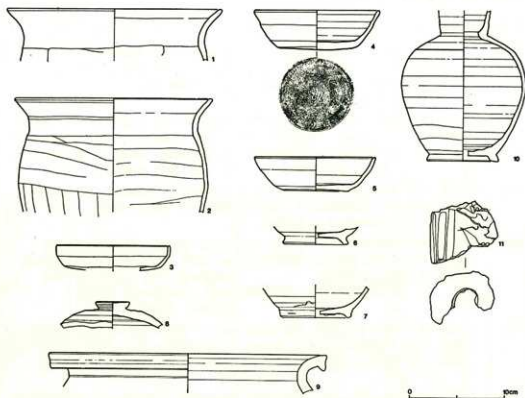


- 1 黒褐色土 2 暗褐色土 3 黒褐色土 4 黒褐色土 5 黒褐色土 (4より黒い)
 6 黒褐色土 7 黒色土 (ロームブロックが点在) 8 褐色土 (ローム混入) 9 黒色土 (焼土を含む) 10 黒色土 (炭化物混入) 11 黒色土 (溝の可能性あり)

第40図 沼下17号住居跡実測図

17号住居跡出土遺物 (第41図・図版26)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 22.5	直立に近く内傾する肩部からやや稜を持って頸部立ち気味になり、口縁部緩やかに外反し、端部をつまみ上げ、外面に稜をもつ。	口縁部横ナデ後、肩部横寛削り、内面寛ナデ、微・細砂粒、胎土淡褐色・器面暗茶褐色。	口縁部18%残覆土
甕	2	口径 20.7 胴部径20.0	胴部は外傾し、上半部に最大径を持ち、内傾し、やや稜を持って括れ、頸部直立し、口縁部稜を持って外反し、端部をつまむ。	口縁部横ナデ後、肩部外面横寛削り、胴下半部縦寛削り、内面寛ナデ、微・細砂粒、茶褐色、内外面アバタ状に剝離、外面煤付着。	口縁部90%・胴部30%残覆土
坏	3	口径 11.9 底径 10.3 器高 2.7	扁平な底部から体部外傾して立上がり、口縁部直立する、端部はやや内湾気味になる。器壁薄い。	口縁部横ナデ、体部寛ナデ、底部寛削り、微・細砂粒・橙褐色。	25%残覆土
須恵坏	4	口径 13.0 底径 8.5 器高 4.1	平底の厚い底部から、外傾して立上がり、稜を持ち、口縁部でやや屈曲し、外傾する。 微・細砂粒・灰色・口縁部外面黒色。	ろくろナデ整形、底部回転糸切り後、周辺部・体部下端回転削り口縁部つまみ手法、内面ろくろ目を残す、口縁部磨滅、白色針状物質含む。丁寧な作り。	完形 焼成良好 床面
坏	5	口径 12.6 底径 7.0 器高 3.5	底部はやや上げ底、体部は屈曲して内湾気味に立上がり、緩やかに段を持ち、口縁部で内湾気味に立つ。	ろくろナデ整形、底部回転糸切り、器面磨滅しており、整形不明。鉄分を多く含む、灰褐色、軟質。	口縁部40%・底部100%残床直
坏	6	底径 6.5	底部はやや上げ底。体部は屈曲して外傾気味に立上がる。高台はハの字状に外反し、端部に凹線を有す。	水挽き整形。底部回転糸切り、高台内面に接合痕を残す。微・細砂粒、淡灰色。	底部30%残覆土
坏	7	底径 7.8	底部平底。体部は外傾気味に立上がる。高台は断面台形状を呈する。半酸化炎焼成。	粗雑な作り、水挽き整形、底部回転糸切り、高台接合後の寛ナデ時の粘土付着、細砂粒・鉄分多い、底部・内面橙褐色・外面灰色。	底部20%残覆土
蓋	8	肩部径 8.5	頂部中央は平坦、頂部は稜を持って途中で外傾し、更に角度を深くする。鈕は中央に突起はなく厚い。	水挽き整形、頂部中央に回転糸切り痕を残し、肩部回転削り、細砂粒、灰色。	頂部25%残 焼成良好 覆土
甕	9	口径 29.1	内傾する肩部から強く外反し、端面は外向し、断面三角形を呈する。	巻き上げ、水挽き整形、細砂粒多く含む、胎土紫褐色・濃灰色。	口縁部10%残 焼成良好
灰釉 長頸瓶	10	頸部径 5.4 肩部径13.0 底径 7.1 残高 15.8	胴部は外傾して立上がり、肩部は張り、強く内傾し、稜を持って屈曲し、頸部は直立する。高台はハの字状に立ち、端面はやや内向する。	巻き上げ後、水挽き整形、胴下半～底部にややろくろ目を残す。胴上半部横ナデ、下端部削り痕を残す、高台はつり付け後、ろくろナデ整形、頸部～肩部に淡緑色の釉をかけ、胴下半部に垂れる。灰色。	20%残 焼成良好 覆土・16住・溝・表探と接合
輪羽口	11	外径 7.0 内径 2.7	円筒形	荒い砂粒を含む、7～10mmの小石・スサが混入する。	破片、覆土



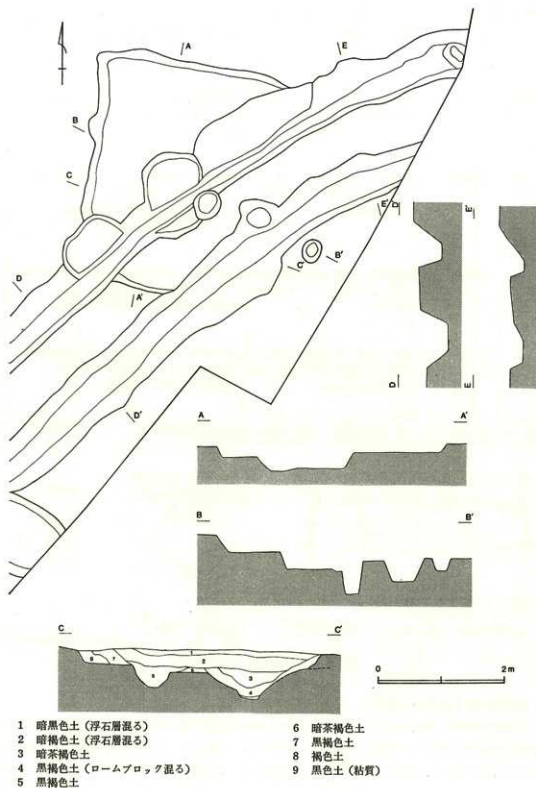
第41図 17号住居跡出土遺物実測図

18号住居跡 (第42図・図版12)

発掘区の東側に位置する。1号溝及び、これから分岐する溝によって切られており、覆土の大部分はこの2条の溝の覆土であり、残存状態は悪い。大きさは(3.00以上)×3.71mで、方形を呈するものと思われる。壁高は西壁で20cmを測る。床面はほぼ平坦である。竈は不明。ピットは3カ所確認されているが、本跡に伴うかどうか不明。遺物は土師器甕、須恵器坏等の破片、砥石が覆土中から出土している。

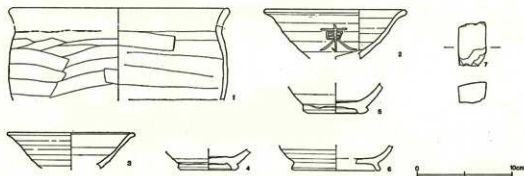
18号住居跡出土遺物 (第43図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	胴径 23.1	肩部はあまり張らず、やや外傾して立上がり、やや内傾し、頸部でやや折れ、口縁部立ち気味に外反する、口縁部を欠く。	口縁部横ナデ後、肩部外面横筭削り、内面筭ナデ。内面刻離、微・細砂粒、淡褐色・一部橙褐色、頸部に輪積み痕を残す。	肩部17%残覆土
坏	2	口径 14.7 底径 (5.4)	底部小さく、高台がつく。体部外傾して立上がり、口縁部で立ち気	水挽き整形、体部にろくろ目を残す。細砂粒・白色砂粒含む、薄褐	口縁部50%残覆土



第42図 沼下18号住居跡実測図

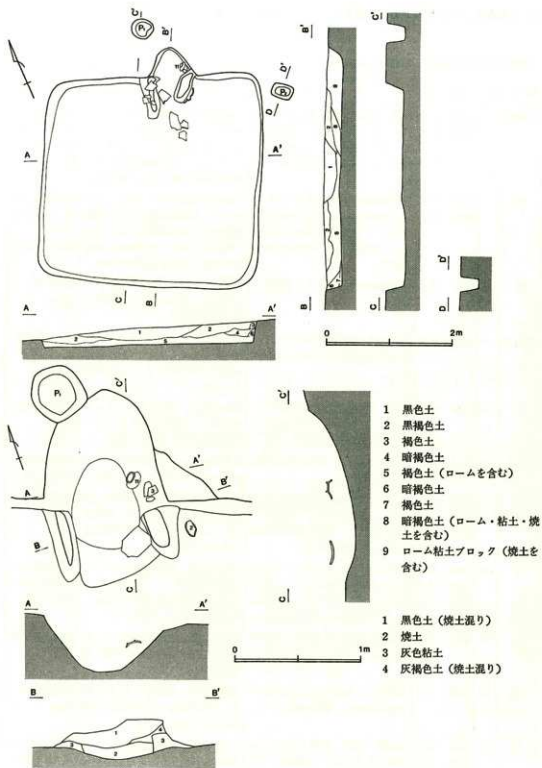
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	3	口径 13.3 底径 (6.1)	味になり、端部をつまみ出し、玉縁となり、肥厚する。	色、半酸化炎焼成、「東」の墨書あり。	
坏	4	底径 6.3	体部外傾して立上がり、口縁部でやや立ち気味になり、端部をややつまみ出し、やや肥厚する。	水挽き整形、体部にろくろ目を残す。細砂粒・白色砂粒含む、灰色。	口縁部17%残覆土
坏	4	底径 6.3	器壁厚い、体部は外傾して立上がる。高台は厚く低い。内湾気味に立ち、端面は丸い。	水挽き整形、底部回転(?)糸切り、高台接合後、周辺部をろくろナデ。外面に接合痕を残す、粗雑なつくり。微・細砂粒、灰色。	底部のみ45%残覆土
坏	5	底径 6.7	器壁厚い、体部は立ち気味に外傾する。高台は幅広く、不整形、端面は丸い。	水挽き整形、底部は高台接合後、ろくろナデ整形・外面は無整形、微・細砂粒・橙褐色、酸化炎焼成。	底部のみ38%残覆土
碗	6	底径 8.9	薄手、体部は立ち気味に内湾して立上がる、底部は平底、高台は薄くハの字状に立つ。	水挽き整形、底部回転糸切り、高台接合後、ろくろナデを施す。微・細砂粒多く含む、淡灰褐色。	底部23%残覆土
砥石	7	長さ(4.4) 幅 2.9 厚 2.0	上面・側面の二面を使用・両端を欠く。		凝灰岩質



第43図 18号住居跡出土遺物実測図

19号住居跡 (第44図・図版13)

発掘区の南側の一群中にある。大きさは3.45×3.49mの西側の辺のやや短かい台形状を呈する。主軸の方向はN-27°-E。壁高は東側で深く33cmを測る。床面はほぼ平坦である。竈は北壁を掘り込んでつくられており、粘土を固めた袖が残っている。ピットは屋外に2ヶ所確認されており、P₁は竈に近すぎる為、やや疑問が残るが、一応本跡に伴うものと考え。遺物は甍付近くに集中してお

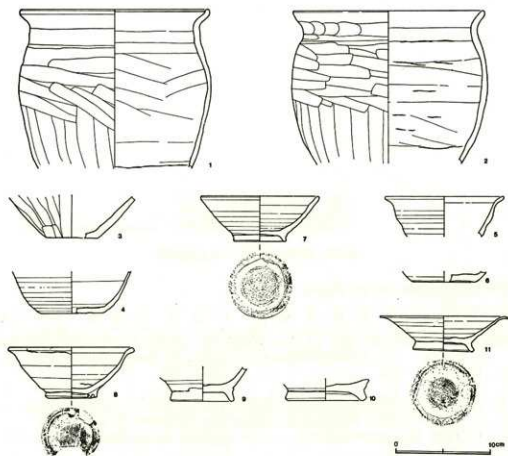


第44図 沼下19号住居跡実測図

り、土師器甕、坏、皿等があり、覆土中からは須恵器坏等の破片が出土している。

19号住居跡出土遺物 (第45図・図版26)

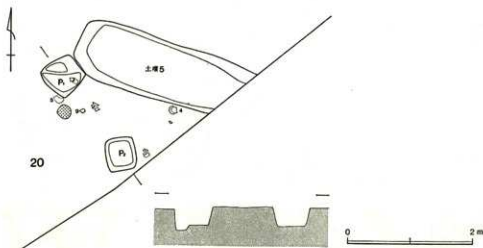
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 19.8 胴径 20.4	肩部やや張る。胸部直立気味に外傾し、緩やかに内傾し、稜を持ちやや括れ、頸部直立し、括れて口縁部大きく外反し、端部強く内湾。	口縁部外面荒い横ナデ成形、内面横ナデ、肩部外面横削り、胸部斜め、及び縦削り。内面横方向ナデ。端部内面に輪積痕を残す。細砂粒、暗茶褐色・肩部一部黒色。	口縁部20%・胸部30%残 №5・6・7 覆土
甕	2	口径 20.0 胴径 20.7	肩部丸味を帯びる。器壁やや厚い、胸部外傾し、肩部で内傾し稜を持ちやや括れ、頸部短く直立し、口縁部外反し、端部は丸味を帯びる。	口縁部外面荒い横ナデ成形、内面横ナデ、肩部外面横削り、胸部縦削り、内面横方向ナデ、内面に輪積痕を残す。口縁外面に指頭痕を残す。細砂粒、橙褐色・黒斑。	口縁部ほぼ完存、体部下半を欠く。 №1、№4・6
甕	3	底径 5.5	体部外傾して立上がり、器壁薄くなる。	体部縦削り、内面割離顕著、底部削り、細砂粒、胎土薄褐色・器面淡茶褐色。	底部30% №3
須恵坏	4	底径 6.6	底部平底、体部内湾気味に立上がり、直立気味に外傾する。器壁薄い。	水挽き整形、底部回転糸切り、体部外面にろくろ目をやや残すが、内面は丁寧に横ナデ、白色砂粒含む、灰色。	体・底部18% 残 焼成良 覆土
坏	5	口径 12.3	薄手。体部内湾気味に立上がり、屈曲して一度張り、立ち気味になって強く口縁部外反する。	水挽き整形、体部外面にろくろ目を残すが、内面は丁寧に横ナデ、白色砂粒多い、灰色、軟質。	口縁部12% 残 覆土
坏	6	底径 6.6	底部やや上げ底、体部やや内湾気味に立上がる。	水挽き整形、底部回転糸切り、細砂粒・石英砕片含有・濃青灰色。	底部45% 残 焼成良好 覆土
坏	7	口径 12.3 底径 5.8 器高 4.7	底部やや上げ底、体部外傾して立上がり、若干内湾し、口縁部そのまま外傾する。高台端部外反気味に直立し、端面は丸い。	水挽き整形、底部回転糸切り、体部にろくろ目を残す。微・細砂粒多い。胎土灰黒色・器面炭素吸着し黒色、軟質。	23% 残 覆土
坏	8	口径 13.0 底径 5.5 器高 5.3	体部外傾して立上がり、やや稜を持ち口縁立ち気味になり、端部で大きく外反し、肥厚する。高台厚く、丸味を持つ。半酸化炎焼成。	水挽き整形、底部回転糸切り、口縁部内外面横ナデ、微・細砂粒、灰褐色・器面橙褐色部分があり、塗布状に見える。軟質。	口縁部43%・ 底部70% 残 №2・覆土
埴	9	底径 6.4	体部直立気味に立上がる。底部平底、厚い。高台厚く高くハ字状。	水挽き整形、底部回転糸切り、高台接合痕残す。白色砂粒多量、暗灰色。	底部のみ完 存 覆土
埴	10	底径 7.1	器壁厚い、底部平底、高台分厚くハ字状に立ち、端面丸味をもつ。	水挽き整形、底部ろくろナデ整形、胎土灰褐色・器面淡褐色・黒斑あり。半酸化炎焼成。	底部40% 残 覆土
皿	11	口径 13.5 底径 5.9 器高 3.6	底部厚く平底、体部は外傾し、口縁部で大きく外反し器壁薄い。高台高くハ字状に立ち、端面やや丸い。	水挽き整形、底部回転糸切り、体部外面にろくろ目を残す。細砂粒・粗砂粒を含む。橙褐色・酸化炎焼成。	口縁部15% 他 完存・焼成 良好・№2



第45図 19号住居跡出土遺物実測図

20号住居跡（第46図）

発掘区の南端にあり、一部調査区域外にかかっている。周囲を3号溝によって切られており、5号土壌に切られている。この為住居のプラン等は不明で、平坦な床面と、遺物の拡がりから、その存在を推定したものである。ピットは2カ所確認されているが、方形状のプランを持ち、方向がやや異なる為、本遺構に伴うものか一考を要する。遺物は床面から須恵器坏、覆土中から、土師器碗・坏等と砥石が出土している。

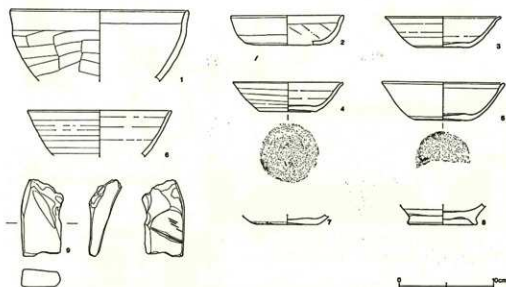


第46図 沼下20号住居跡・5号土坑実測図

20号住居跡出土遺物 (第47図・図版26)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師鉢	1	口径 18.7	体部は外傾して立上がり、稜を持ち、口縁部は外反気味に直立する。	内面・口縁部横ナデ、体部外面横笥削り、微・細砂粒、器面磨滅・淡褐色・軟質。	口縁部26%残 №4・覆土
坏	2	口径 11.8 底径 9.0 器高 3.1	扁平な底部から稜を持ち体部は外傾し、口縁部は稜を持って直立気味にやや外反する。	内面・口縁部横ナデ、体部外面横削り、底部笥削り。微・細砂粒、器面磨滅、橙褐色、軟質。	32%残 №2
須恵坏	3	口径 12.2 底径 5.6 器高 3.2	底部平底。体部は緩やかに内湾気味に立上がり、口縁部は外傾し、端部をつまみ出す。器壁は薄い。	水挽き整形。底部回転糸切り、微・細砂粒、胎土暗茶褐色・器面薄褐色、半酸化炭焼成、軟質。	10%残 覆土
坏	4	口径 11.5 底径 6.1 器高 3.1	底部ややや上げ底。体部は稜を持ち緩やかに外傾し、口縁端部をややつまみ出す。器壁は薄い。	水挽き整形。底部回転糸切り、細砂粒・片岩砂片・鉄分含有。濃青灰色、口縁端部やや磨滅。	口縁部45% 底部完存 焼成良好 №1・床直
坏	5	口径 12.8 底径 5.8 器高 4.0	底部ややや上げ底。体部は緩やかに内湾気味に立上がり口縁部は外傾し端部をややつまみ出す。薄い。	水挽き整形。底部回転糸切り、細砂粒・石英砂片・鉄分含有。二次加熱か淡灰褐色化・本来暗灰色、内面に煤付着。	口縁部37% 底部半欠 №5
埴	6	口径 15.1	器壁薄い。体部内湾気味に立上がり、口縁部外傾する。端部をややつまむ。	水挽き整形。細砂粒・白色砂粒・鉄分含有、濃青灰色。	口縁部30%残 覆土
坏	7	底径 6.5	器壁やや厚い。底部ややや上げ底。体部は緩やかに立上がる。	水挽き整形。底部回転糸切り、細砂粒分多い。白色砂片含有、濃灰色。火だすきあり。	底部60%残 覆土

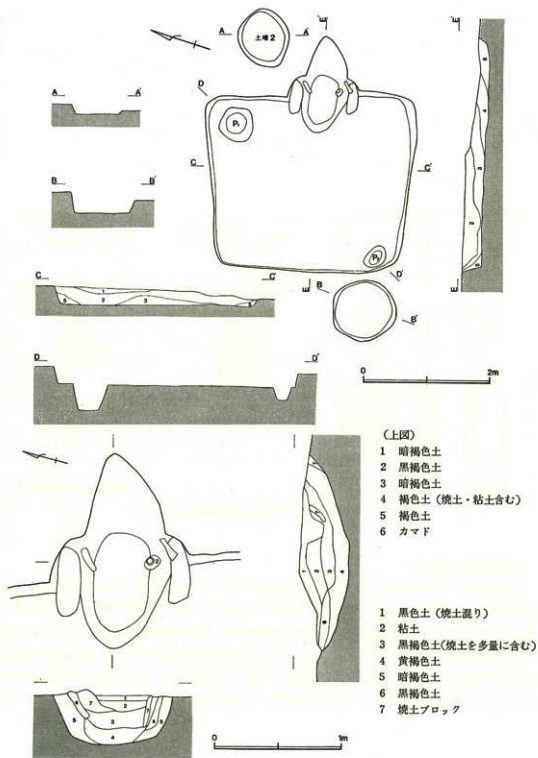
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	8	底径 7.1	器壁やや厚い、底部上げ底状。体部外傾気味に立上がる、高台はハの字状に外反して立ち、端面は尖り気味に丸味をもつ。	水挽き整形。底部回転余切り、高台接合時に指ナデを施す。外面に接合痕残し、粗雑なつくり、細砂粒、灰色、軟質。	底部42%残覆土
砥石	9	残存長 8.0 幅 0.4 厚 1.8	四面を使用し、一端を欠く。又、一面は凸面状となっており、これは手に持って使用したものかと思われる。		凝灰岩質



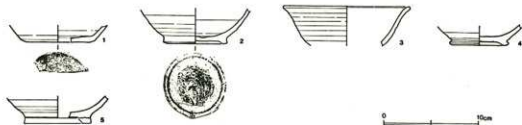
第47図 20号住居跡出土遺物実測図

21号住居跡 (第48図)

発掘区南側の一群中にあり、南4mに19号住居跡がある。又、東側に隣接して2号土壌がある。大きさは2.86×3.34mの、竈をもつ東壁が西壁に比べてやや長い方形を呈する。主軸の方向はN-76°-E。壁高は西側で深く30cmを測る。床面はほぼ平坦である。竈は東壁中央部を掘り込んでつくられており、更に両脇を一段掘って、片岩を立てて芯とし、粘土を固めて袖にしている。層序から天井部の崩れた状態がわかる。ピットは2ヶ所確認されており、P₁は貯蔵穴と考えられる。遺物は、須恵器坏、土師器坏等の破片が出土している。又、覆土中からU字形の鉄製鎌先がほぼ完形で出土している。



第48図 沼下21号住居跡実測図



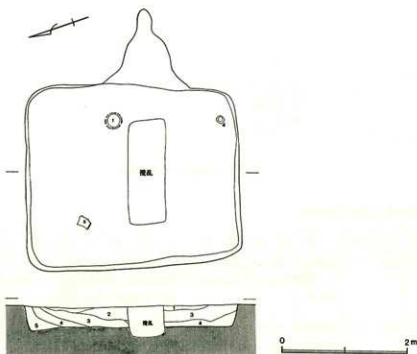
第49図 21号住居跡出土遺物実測図

21号住居跡出土遺物 (第49図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	底径 7.0	底部平底、体部は稜を持って外傾し、更に稜を持って立ち気味に外傾する。	水挽き整形。底部回転糸切り後、底部全面・体部回転削り、細砂粒・白色砂片含む、灰色。	底部60%残 焼成良好 覆土
坏	2	底径 6.7	底部平底、体部はやや内湾気味に立上がる、高台は低く、やや外反し、端部は稜を持ち、端面やや外向。	水挽き整形。底部回転糸切り、細砂粒・最大径5mmの砂片を多く含む、気泡多い、濃灰色。	底部・体部下 半完存・焼成 良好・覆土
坏	3	口径 13.3	体部内湾気味に立上がり、外傾し、端部は緩やかに外反し、つまむ。	水挽き整形。微・細砂粒、暗灰茶褐色、外面やや煤付着、内外面斑状に淡褐色部がある。半還元炎焼成。	口径部7%残 覆土
坏	4	底径 5.8	体部外傾気味に内湾し立上がる。高台低く、強く八字状に外反する。端部は稜を持ち、端面丸く外向する。	水挽き整形。底部高台接合時にろくろナデ整形、細砂粒・荒い砂粒を多く含む、淡橙褐色・酸化炎焼成。	底部48%残 覆土
坏	5	底径 6.9	体部屈曲し、外傾気味に立上がる。高台欠失。	水挽き整形。底部回転糸切り、細砂粒・粗砂粒を含む、濃灰色。	底部25%残 覆土

22号住居跡 (第51図・図版14)

発掘区の北側に位置する。東側に24、南西に9号住居跡が散在する。中央部及び東側の二隅を後世の攪乱溝が切っており、残存状態は悪い。大きさは2.94×3.40mのやや隅の丸い方形を呈する。主軸の方向はN-108°-E。壁高は北壁で40cmを測る。床面はほぼ平坦である。竈は図示した部分に焼土が散布していたことから、その存在を推定したもので、残存状態が悪く、その構造等は不明である。ピット等の施設は検出されなかった。遺物は竈周辺から出土しており、床面上から土師器甕が口縁部を下にして伏せた状態で、又、土師器坏も同様の状態で出土している。覆土中からは土師器甕底部破片、須恵器壺破片等が出土している。



- 1 黒褐色土
2 暗茶褐色土
3 茶褐色土

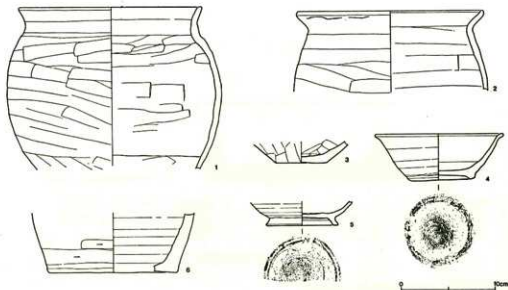
- 4 茶褐色土（ロームブロックを含む）
5 暗褐色土（ロームブロックを含む）

第50図 沼下22号住居跡実測図

22号住居跡出土遺物（第51図・図版26）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 19.0 胴径 22.5	胴は丸い。器壁は厚い。体部緩やかに立上がり、緩やかに内傾し、稜を持ち大きく括れ、頸部直立し、口縁立ち気味に外反する。	口縁部強く横ナデ、肩部外面横篋削り、胴部斜め篋削り。内面木口状工具による横方向ナデ。頸部に接合痕を残す。細砂粒、橙褐色、胴部外面一部煤付着。	口縁部完存・肩部70%残 №1
甕	2	口径 19.4 胴径(20.5)	肩部は張らず、緩やかに内傾し、かすかに稜を持ち、頸部はそのまま内傾し、括れて口縁大きく外反し、端部内傾し、稜を持つ。	口縁部強く横ナデ、肩部外面横篋削り、内面横方向ナデ、各部に指頭痕を残す。細砂粒・茶褐色、随所に褐色斑をもつ。	口縁・肩部45%残 №8
甕	3	底径 5.5	体部浅く外傾気味に立上がる。	体部縦篋削り、底部篋削り、内面寛ナデ。	底部25%残 覆土
須恵環	4	口径 13.3 底径 7.2 器高 4.8	底部上げ底状、体部厚くやや内湾気味に立上がり、口縁端部をつまみ出す。高台広く低く稜がない。	ろくろナデ整形、微・細砂粒、内面黒色・残泥付着・淡褐色・2次加熱により外面割離・煤付着する。底部回転糸切り。	口縁部55%残 他完存 №2
環	5	底径 6.9	器壁薄い、底部平底、体部内湾気味に立上がる。高台薄く八字状に開き、端部稜を持ち、端面凹面・水平。	水挽き成形、底部回転糸切り、外面丁寧に横ナデ、微・細砂粒・胎土・内面・底部橙褐色・外面黒色半酸化炭焼成。	底部のみ55% 残 焼成良 覆土

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵甕	6	底径 13.5	体部直立気味に立上がる。 底面刺離。	巻き上げ後、水挽き整形、体部横 篋削り、内面にろくろ目を残す。 細砂粒、石英片含有・濃青灰色。	体部12%残 焼成良好 覆土



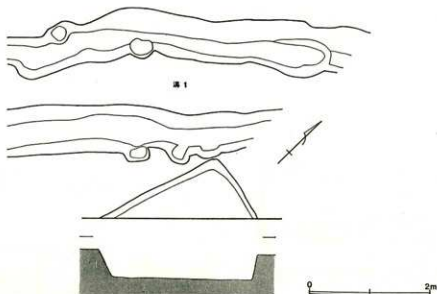
第51図 22号住居跡出土遺物実測図

23号住居跡 (第52図)

発掘区の東側に位置する。遺構の大部分は区域外にあり、北西の隅を一部調査できたのみである。壁高は45cmを測る。床面はほぼ平坦である。一応住居跡の一部と考えられる。出土遺物はない。

24号住居跡 (第53図・図版15)

発掘区の北東隅に位置する。南に10号、西に22号の各住居跡がやや離れて散在している。竈、及びその周辺が調査できたもので、遺構の大部分は発掘区域外にかかっている。大きさは(1m以上)×2.50mの、やや南北方向に偏した方形を呈するものと思われる小型の住居跡である。主軸の方向はN-123.5°-W。壁高は北側でやや深く、46cmを測る。竈は西壁を堀り込んでつくられており、両脇は袖状に堀り残し、結晶片岩の板石を両側に立て、甕を乗せる部分を約25cm四角程残して、その上に板石を横に渡し、焚口及び煙道へつながらる部分を覆っており、周囲を粘土及びロームを貼って使用していたものと思われる。竈のほぼ中央部には25cm程の長さの河原石を立て、土器4、1、2の順でこの上に伏せた状態で出土しており、支脚として使用されたものと思われる。煙道は壁外に更に60cm程延びている。遺物は上記の土師器坏の他、土師器甕、台付甕、坏が竈内と竈の向って左脇から出土している。

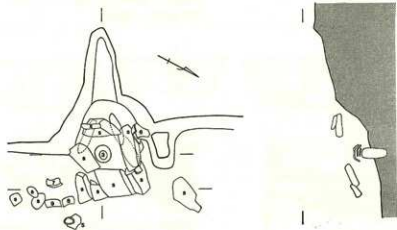
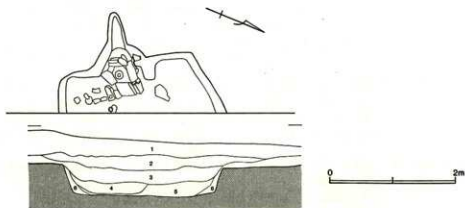


- | | |
|---------|--------------------|
| 1 黒褐色土 | 4 黄褐色土 (ロームブロック混入) |
| 2 暗茶褐色土 | 5 茶褐色土 (ロームブロック混入) |
| 3 茶褐色土 | 6 暗褐色土 |

第52図 23号住居跡実測図

24号住居跡出土遺物 (第54図・図版27)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師環	1	口径 11.9	器壁やや厚い、小さい底部から浅く立上がり、体部中央で厚くなり外傾して口縁端部をややつまむ。	内面・口縁部横ナデ、体部指ナデ、下半斜め篋削り、底部篋削り。体部外面指頭痕を残す。細砂粒・粗砂粒を含む、橙褐色	底部一部他完存 甕内4(中央)
		底径 5.0			
		器高 4.4			
土師環	2	口径 12.6	器壁厚い。扁平な底部から、外傾し、口縁部は立ち気味になり、端部をややつまむ。	内面・口縁部横ナデ、体部指ナデ 底部篋削り、底部円盤状、体部巻き上げ、口縁部輪模みの痕跡を残す。細砂粒・橙褐色。	口縁部一部欠失・完存 甕内3(上)
		底径 6.8			
		器高 5.1			
環	3	口径 11.7	体部立ち気味に外傾し、口縁端部をややつまみ出す。	水挽き整形、内外面横ナデ、体部にややろくろ目を残す。半還元炎焼成(二次加熱か) 淡灰茶褐色。	口縁部24%残 焼成良 甕
環	4	底径 5.0	底部やや厚く、体部外反気味に屈曲して立上がる。	水挽き整形。底部回転糸切り、胎土淡褐色・一部橙褐色・底部黒色・二次加熱の為、表面亀裂。	底部のみ残 甕内5(下)
台付甕	5	口径 12.8	器壁やや厚い、底部やや大きく、体部内湾気味に立上がり、胴部あまり張らず、やや肩部内傾し、括れて、頸部短く立ち、肥厚して口縁短かく外傾し、端部をつまむ。	口縁部強い横ナデ、肩部横篋削り、体部縦篋削り、内面横方向横ナデ。脚接合部横ナデ、細砂粒・粗砂粒含む、二次加熱により剥落激しい、赤褐色・外面煤付着。	復元実測・上半45%・下半45%残脚口縁部欠失 №7
		底径 5.2			
		残高 13.9			
甕	6	口径 21.8 胴径 23.5	器壁厚い。胴部丸みを持ち、肩部緩やかに内傾し、稜を持って括れ、直立し、口縁部短く外反し丸	口縁部強い横ナデ、肩部外面横篋削り、胴部斜め篋削り、内面木口状工具使用横方向ナデ、細砂粒・	口縁・肩部13%残 甕

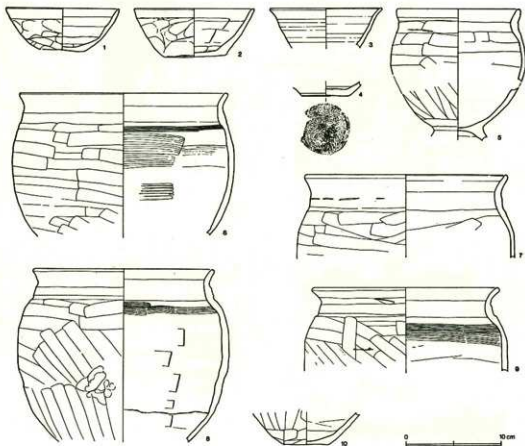


- 1 黒褐色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 茶褐色土
- 4 黄褐色土 (ロームブロック混入)
- 5 茶褐色土 (ロームブロック混入)
- 6 暗褐色土



第53図 24号住居跡実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	7	口径 21.1 胴径 23.0	い。 器壁やや厚い。肩部緩かに内傾し、やや括れ、頸部直立し、口縁外反し、端部をつまみ上げ、丸い。	橙赤褐色、胴部内外面に煤付着。口縁部強い横ナデ、肩部横篋削り、内面篋ナデ、細砂粒・粗砂粒含む、淡褐色・外面煤付着・褐色斑あり。	口縁・肩部50%残 電外
甕	8	口径 18.8 胴径 22.3	器壁やや厚い。体部浅く外傾し、屈曲し、胴部立ち気味になり、肩部張り、強く括れて頸部厚く直立し、括れて短く外反する。	口縁部強い横ナデ、肩部横篋削り、胴部斜め篋削り、体部縦篋削り、内面木口状工具使用横方向ナデ、胴下半部に接合痕を残す、外面粘土付着・細・粗砂粒含む。	口縁部24%・ 胴部50%残 淡褐色 №2・電
甕	9	口径 19.3 胴径 21.5	器壁やや厚い。胴部直立し、肩部張り、内傾し、稜を持ち大きく括れ、頸部直立し、口縁部稜を持って外反する。	口縁部強い横ナデ、肩部外面横篋削り、内面木口状工具使用横方向ナデ、細・粗砂粒含む、淡橙褐色。	口縁部20%残 電外
甕	10	底径 4.7	体部は稜を持って張り気味に立上がる。	体部縦篋削り、下端横篋削り、底部篋削り、内面荒い目の横ナデ、細・粗砂粒・淡橙褐色	底部のみ残 №6



第54図 24号住居跡出土遺物実測図

1号土壇 (第55図・図版16)

発掘区北東側に位置する。大きさは1.19×1.23mの略円形を呈する。壁高は30cm前後で底面は平坦で良く踏み固められて堅緻である。出土遺物なし。時期・性格等不明。

2号土壇 (第55図・図版17)

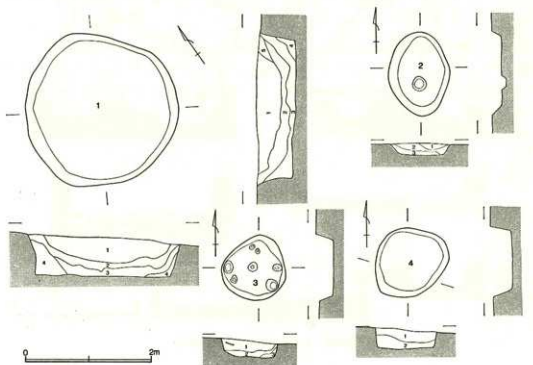
発掘区の南側にあり、1～4号溝に囲まれている。大きさは1.26×0.94mの南北方向に長い楕円形を呈する。確認面から20cmと浅い。壁はゆるやかに立上り、中央に浅いピットがある。近世のものと思われる。

3号土壇 (第55図・図版17)

発掘区南側に位置し、1～4号溝に囲まれている。直径1mの不整形円形を呈し、各所に浅いピットがある。深さは25cmで、やや緩やかに立上る。覆土上層から須恵器甕破片が出土している。時期、性格等不明。

4号土壇 (第55図)

発掘区南側に位置する。1～4号溝に囲まれている。1.15×1.1mの不整形円形を呈し、深さは19cmで底はほぼ平坦で壁は垂直に立上がる。近世に属するものと思われる。出土遺物なし。

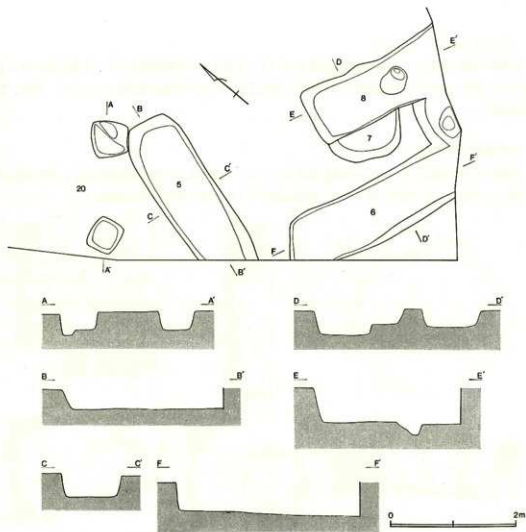


- | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|----------------|---|---------------------|---|-------------------|---|-----|
| 1 | 1 | 黒褐色土 | 2 | 暗褐色土 | 3 | 褐色土 | 4 | 黄褐色土 (ロームブロックを含む) | 5 | 褐色土 |
| 2 | 1 | 黒色土 | 2 | 黒褐色土 (僅に焼土を含む) | 3 | 黒褐色土 (ソフトロームブロック混入) | | | | |
| 3 | 1 | 黒褐色土 | 2 | 暗褐色土 | 3 | 褐色土 | | | | |
| 4 | 1 | 黒褐色土 | 2 | 黒色土 | | | | | | |

第55図 1・2・3・4号土壇実測図

5・6・7・8号土壇 (第56図・図版18)

発掘区南端に位置する。2・3号溝の南側に切合い、もしくは隣接して存在する。いずれも発掘区域外にわたっており、全容は掴めなかった。この中で、5・6・8号はいずれも、幅が95、90~95、90~95cmと非常に近く、形状も似通っており、性格は同じ、時期的にも近いものと考えられる。7号土壇は8号土壇に切られており、それらよりもやや古い時期が考えられよう。時期は近世のものと思われる。



第56図 5・6・7・8号土壇実測図

1・2・3・4号溝 (第4図・図版18・19)

発掘区南及び東側に集中する。1号溝は南西から北東へ走り、18号住居跡付近で大きく曲がる。2・3・4号溝はこれと直交し、4号溝は切られている。断面形態は底面は平坦、立ち上がりはやや急で、上方で緩やかになる。溝の性格としては掘り方が雑な所から、又高低差等を考慮しても、水路用水等ではなく、邸等の境界を仕切り、笹等を防ぐ根切り溝と思われ、近世のものであろう。

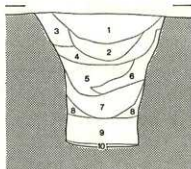
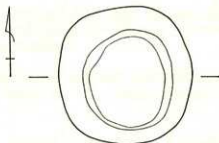
1・2・3・4号溝出土遺物 (第58図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 13.3 残高 2.7	やや丸みを持つ底部は外傾気味に立上がり、口縁部は稜を持ち、立ち気味になり、端部をつまみ上げる。器壁は薄い。	内面・口縁部横ナデ。底部寛削り細砂粒・橙褐色・一部黒色。	口縁部10%残 溝№1覆土
坏	2	口径 14.2 器高 4.1	やや厚手、扁平な底部は丸みを持って立上がり、そのままやや稜を持って口縁部直立する。	内面・口縁部横ナデ。体部寛ナデ底部寛削り。細砂粒・橙赤褐色・内面・口縁外面に煤付着。	口縁部27%残 溝№1覆土
須恵坏	3	口径 12.0	口縁は外傾し、端部をややつまむ。	水挽き整形。外面にろくろ目を残す、細砂粒・白色砂粒多く含む。暗灰褐色・半還元炭焼成。	口縁部24%残 溝№1覆土
坏	4	底径 8.5	底部は平底、厚い、体部はやや丸みを持って、外傾し立上がる。	水挽き整形。底部回転糸切り後、回転寛削り、細砂粒・白色砂粒・針状物質を含む。濃灰色。	底部50%残 焼成良 溝№1覆土
坏	5	底径 7.4	底部は若干上げ底状、体部は屈曲し、内湾気味に立上がる。	水挽き整形底部回転糸切り。細砂粒・白色砂粒含む、淡灰色。	底部25%残 焼成良 溝№1覆土
坏	6	底径 5.8	底部は小さ目、分厚く平底状。高台幅広く鈍く稜を持ち、端部丸味を持ち、外向、体部は薄い。	水挽き整形。底部回転糸切り、高台部外面に接合痕を残す。細砂粒・径5ミリの礫を含む、砂粒分多い、灰色	底部のみ残 溝№1覆土
須恵壺	7	鉦径 3.5 頂径 7.2	やや肩の張る、深い形。鉦はつぶれた宝珠形、全体形はやや歪む。濃灰色。	頂部は回転糸切り後、回転寛削り、水挽き整形。内面にろくろ目を残す。細砂粒・白色砂粒を含む。	頂部26%・鉦 残存 溝№1覆土
須恵壺	8	頸部径24.4	大型壺、肩部はやや丸みを帯び、丸みを持って折れ、頸部は直立気味に立上がる。	巻き上げ、ろくろナデ整形、頸部に波状文を施し、横ナデ、細砂粒・白色粗砂粒多く含む。灰色。	頸部8%残 溝№1覆土
壺	9	口径 19.3	肩部がすかに張り、緩やかに括れ、内面に稜を持ち、口縁外反し、端部をつまみ上げる。	巻き上げ、ろくろナデ整形、細砂粒多い。石英砂片含む、灰色。	口縁部8%残 溝№1覆土
羽釜	10	口径 22.2	胴部は薄く、口縁部内傾気味にな	ろくろナデ整形、胴部接合痕を上	口縁部7%残

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
羽釜	11	口径 22.6	り端面やや内向する、鋳は断面三角形状に尖り、やや上向き。	面に残す、細・粗砂粒・胎土淡褐色・外面黒色、半酸化炭焼成。	焼成良好 溝№1 覆土
蓋	12	紐径 3.1 頂径 5.8	胴部中央は平組、緩やかに裾部へ続く、紐はややつぶれた宝珠形、先端はやや高い。	水挽き整形、器面磨減・細・粗砂粒多い。橙褐色・一部淡灰褐色・半酸化炭焼成。	紐・頂部12% 残 溝№4 覆土
須恵鉢	13	口径 26.5	口縁部緩やかに外反し、端部で肥厚し、丸みを持つ。	水挽き整形、細砂粒・白色砂粒を含む、淡灰色・焼成良好。	口縁部8%残 溝№4
須恵壺	14	口径 27.6	頸部緩やかに外反し、口縁部更に外反、端面は屈曲し、三角形状に尖る。整ったつくり。	水挽き成形、内面にろくろ目を残す。細・粗砂粒・黒色・胎土紫褐色、硬質。	口縁部18%残 焼成良好 溝№4
須恵鉢	15	底径 12.4	器壁分厚い、体部は緩く折れて、外傾気味に立上がる。	巻き上げ、指ナデ整形、内面横ナデ整形、外面指頭痕を残す、内面平滑・細・粗砂粒・暗灰色。	底部25%残 溝№4

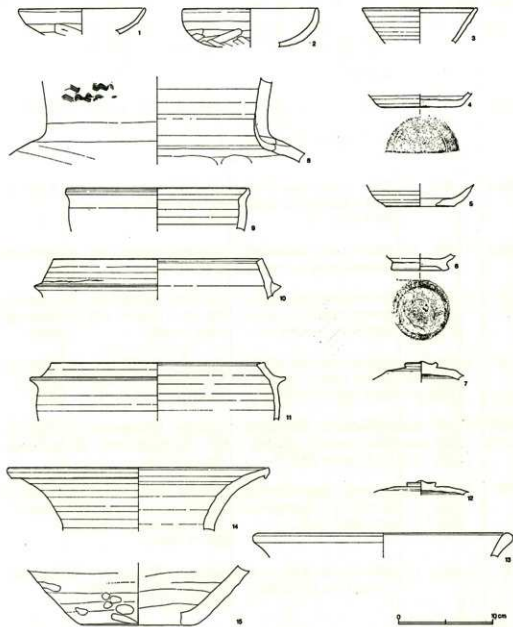
井戸跡 (第57図・
図版16)

発掘区の南東に位置し、1・2・3・4号溝に囲まれている。確認面でやや広く、1.45×1.35mで、漏斗状に狭まり、0.8×0.95mとなる。底は1.41mの深さにあり、ハードローム層を掘って、粘質ローム層に達している。調査時にも、底では湧水があり、浅いながらも、宙水を利用して機能していたものと思われる。近世に属するものと思われる。堆積土下部の土壤サンプルを採取し、分析を依頼した。(本文179頁)



- 1 黒褐色土 2 暗褐色土 3 褐色土 (ロームを含む) 4 黒色土
5 黒褐色土 6 暗褐色土 7 黒褐色土 (5より黄色い) 8 褐色土 (ロームを含む) 9 暗褐色土 (ローム粒子を多量に含む) 10 黒色土 (粘質)

第57図 沼下井戸跡実測図

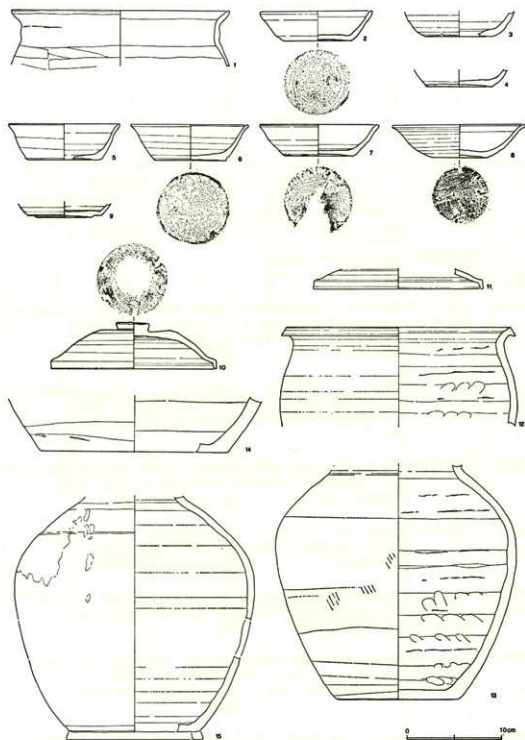


第58図 沼下1・2・3・4号溝出土遺物実測図

グリッド出土遺物(1) (第59図・図版27)

グリッド調査中に出土した遺物は多く、これは遺跡自体が斜面部の為、プラン確認以前に遺物が多く出土してしまった事のようなのである。以下の遺物は一定の範囲から出土したものであるが、一括できるまでの確認はない。この為、一応後掲したものとは別に説明する。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 22.9	肩部張らず、内傾し、稜を持ちやや歪れ、頸部直立し、口縁部は外反し、端部をややつまみ上げる。器壁は薄い。	口縁部横ナデの後、肩部外面横置削り、内面寛ナデ、頸部に輪積痕を残す。細砂粒・橙褐色。	口縁部18%残
須恵坏	2	口径 11.7 底径 7.2 器高 3.1	底部やや上げ底。体部稜を持って緩やかに立上がり、外傾し、口縁をややつまみ、端部でやや肥厚する。	水挽き整形、底部回転糸切り後、周辺部回転削り、細砂粒・7ミリ砂片含む。淡灰色。	口縁部13%・ 底部完存
須恵城	3	底径 7.2	底部やや上げ底。体部は稜を持ち屈曲して内湾気味に立上がる。体部やや厚手。	水挽き整形、体部外面にろくろ目を残す。底部回転糸切り、細・粗砂粒、灰色。	底部40%残
須恵坏	4	底径 7.0	底部やや上げ底、体部は稜を持ち内湾気味に立上がる、やや厚手。	水挽き整形、底部回転糸切り、細砂粒・淡灰色。	底部40%残
坏	5	口径 11.6 底径 8.2 器高 3.8	底部やや上げ底、体部は稜を持ち、直立に近く外傾して立上がり、口縁部をつまみ、やや外反する。	水挽き整形、底部回転糸切り、細砂粒・胎土・器面黒色、口縁一部灰褐色・土師質。	口縁部18%・ 底部40%残 焼成良
坏	6	口径 12.4 底径 7.5 器高 3.8	底部やや上げ底、体部は稜を持ち、直立に近く外傾して立上がり、口縁部をつまみや外反する。	水挽き整形、底部回転糸切り、細砂粒・淡灰褐色、内面黒味があり、胎土黒色・土師質。	口縁部2%・ 底部完存 焼成良
坏	7	口径 12.4 底径 7.5 器高 3.3	底部やや上げ底。体部内湾気味に外傾して立上がり、口縁部をややつまみ、端部やや外反する。	水挽き整形、底部回転糸切り、細砂粒、口縁部器面淡灰褐色・他、黒色・くすべ焼成。	口縁部5%・ 底部80%残
坏	8	口径 14.0 底径 5.9 器高 3.5	底部上げ底、体部緩やかに内湾気味に立上がり、口縁部で緩やかに外反し端部をつまむ。	水挽き整形、外面にろくろ目を残す。底部回転糸切り、細・粗砂粒灰褐色・底部淡灰褐色、半還元炎焼成・やや軟質。	口縁部13%・ 底部完存
坏	9	底径 6.0	底部やや上げ底、体部大きく屈曲して外傾して立上がる。薄手。	水挽き整形、底部回転糸切り、細砂粒・胎土橙褐色・表面薄褐色、半酸化炎焼成。	底部45%残
須恵蓋	10	口径 17.4	頂部中央は凹み、肩が張る、全体に深く裾部は急角度で降り、端部屈曲して外反気味に立つ。鈕は高く、宝珠形の崩れた形をとる。	水挽き整形・肩部のみ回転削り、裾部内面にろくろ目を残す。細・粗砂粒・白色砂片含む、灰色。	裾部25% 頂部は完存
須恵蓋	11	口径 17.9	裾部は内湾気味に降り、端部で屈曲し、外傾気味に立つ。	水挽き整形、裾部にややろくろ目を残す、細・粗砂粒・灰色・軟質。	裾部6%残
須恵甕	12	口径 23.7 胴径 25.1	肩部は丸味を持ち、緩やかに内傾し、口縁部大きく外反し、端部を	巻き上げ、水挽き整形、内面に巻き上げ痕を残す、細砂粒・白色砂	口縁・胴上半部40%残

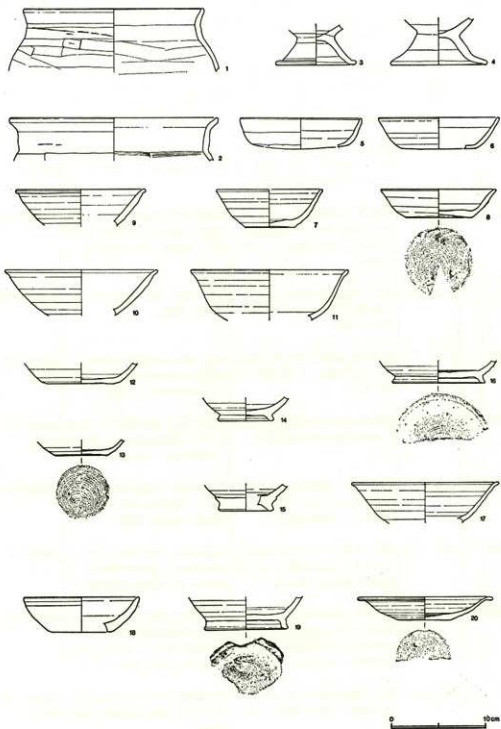


第59図 グリッド出土遺物実測図(1)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵甕	13	頸部径13.8 胴径 25.5 底径 12.9 残高 25.0	つまみ、稜を持ち、断面三角形。器壁厚く、体部は稜を持って外傾気味に立上がり、肩部に最大径を持ち、緩やかに内傾し、頸部はやや小さくなり括れる。	片を含む。濃青灰色・内面紫褐色。巻き上げ後、水挽き成形。底部回転篋削り、体部軽い回転篋削り、肩部荒い目の横ナデ、胴部指ナデ、内面に巻き上げ痕を残す、細、粗砂粒・暗灰色。	口縁部を欠く60%残
須恵鉢	14	底径 20.0	器壁厚い、体部は稜を持ち、外傾し立ち上がる、内面横方向のナデが施され、やや磨滅して滑らかになっている。	巻き上げ後、水挽き整形・底部、体部回転篋削り、細砂粒・小礫含有・暗青灰色・胎土中央紫褐色・外面自然釉付着。	体部・底部20%残
灰釉壺	15	頸部径10.4 胴径 25.4 底径 14.0 残高 24.8	高台欠失、体部は稜を持って外傾し立ち上がり、肩部に最大径を持ち、緩やかに内傾し、括れる、二次的加熱の為か、外面は器面が荒れるが、内面は釉がガラス質。	巻き上げ後、水挽き整形、内面にろくろ目を残す、底部回転篋削り微砂粒・白色礫含有・肩部に暗緑色～黒褐色の釉がザラついてかかる。内面底部にもたまる。薄灰色。	肩部40%・体下半20%・底部5%残 焼成良好

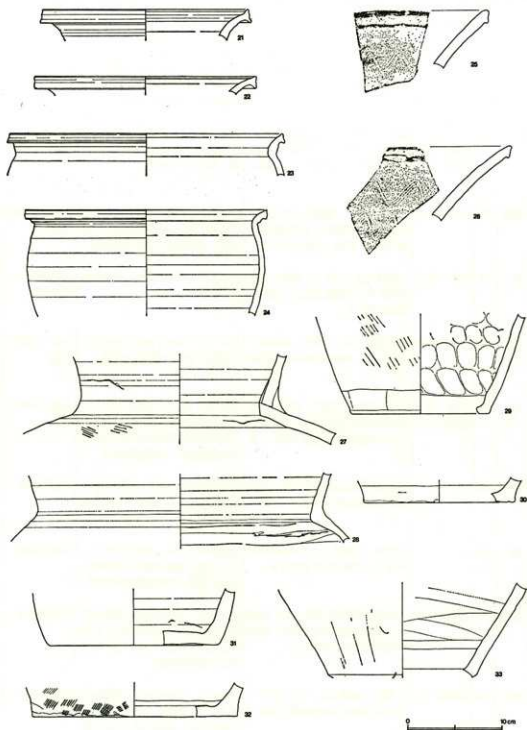
グリッド出土遺物(2) (第60・61・62図、図版28)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 18.9 胴径(22.3)	胴はやや張る。肩部は内湾気味になり、括れて頸部は内傾気味に直立し、口縁部やや外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部強い横ナデ、肩部横篋削り、内面篋ナデ、細砂粒・淡橙褐色、外面一部煤付着、頸部に巻き上げ痕を残す。	口縁部23%残
甕	2	口径 21.9	肩部やや内傾し、稜を持ち強く括れ、頸部外傾気味に直立し、口縁外反し、端部をつまみ外面に稜を持つ。	口縁部強い横ナデ、肩部横篋削り、内面木口莖・横ナデ、細砂粒・軟質・外面一部煤付着・淡橙褐色。	口縁部12%残
台付甕	3	脚部径 8.6	底部から、緩やかに括れて脚部外反し、口縁部で稜を持ち、端部は更に外反し、丸みをもつ。	脚部横ナデ、接合部・端部～内面にかけてやや荒い横ナデ痕を残す。細、粗砂粒・橙褐色	脚部のみ60%残
台付甕	4	脚部径10.2	器壁厚い、脚部は力強く外傾し、口縁部で大きく外反し、端部丸い、やや大型。	底部外面斜め篋削り・接合部～脚部横ナデ・底部内面やや剝離する。細砂粒・橙褐色・外面少量煤付着。	脚部のみ22%残
土師坏	5	口径 12.7 底径 10.2 器高 (3.0)	器壁薄い、扁平な底部から稜を持ち、立上がり、口縁部をつまみ、端部は内湾気味になる。	内面・口縁部横ナデ、体部篋ナデツケ、底部篋削り、細砂粒・淡茶褐色。	口縁部27%残
須恵坏	6	口径 12.7 底径 7.9 器高 3.3	器壁薄い、平底の底部から体部は緩やかに立上がり、外傾し、口縁はやや薄く、端部は丸くなる。	水挽き整形、底部回転糸切り後、周辺部回転篋削り、口縁部ややつまむ・細砂粒多い、淡灰色・口縁部灰色。	20%残
須恵坏	7	口径 11.1 底径 5.4	底部やや上げ底、体部厚く、稜を持って内湾気味に立上がり、外傾	水挽き整形、底部回転糸切り、外面にろくろ目を残す。細・白色砂	約30%残 焼成良好



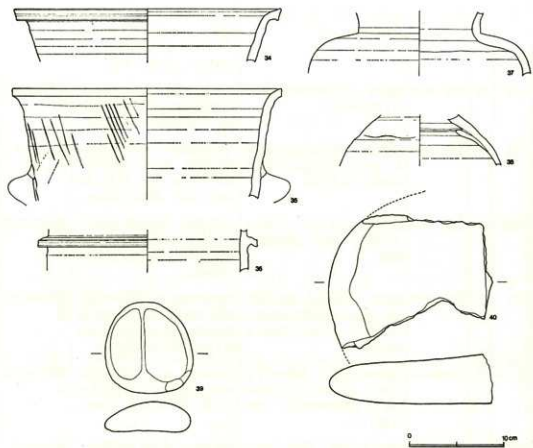
第60図 グリッド出土遺物実測図(2)一1

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	8	器高 4.0	し、口縁端部をややつまむ。全体にやや歪む。	粒・濃灰色。	
		口径 12.0	底部上げ底・厚い、体部稜を持ち、やや内湾気味に立上がり、端部をつまみ、緩やかに外反する。底部内面磨減し、光沢を帯びる。	水挽き整形、底部回転糸切り、外面にややろくろ目を残す、細砂粒・黒色砂粒含む、口縁外面に一部緑色の自然釉分厚く付着。濃灰色。	底部90%~口縁部6%残
		底径 7.1			焼成良好・堅緻・転用現
須恵壺	9	器高 3.0			
		口径 13.5	器壁厚い。体部外傾して立上がり、口縁端部をつまみ、端部は薄く、丸みを持ち、外面に稜をもつ。	水挽き整形、外面にろくろ目を残す、細・粗砂粒多い、暗灰色。	口縁部38%残 焼成良
壺	10	口径 15.9	器壁厚い、体部外傾して立上がり、口縁部で薄くなり、端部をつまみ出し、外面に稜をもつ、坏9に似る。	水挽き整形、外面にややろくろ目を残し、荒れる。細砂粒多く小礫含む、淡灰色・内面一部灰色。	口縁部30%残
壺	11	口径 16.6	薄手、体部内湾気味に立上がり、口縁部立ち気味になり、端部をややつまみ出す。	水挽き整形、細・粗砂粒多い、濃青灰色・硬質。	口縁部14%残
須恵坏	12	底径 7.0	底部平底、体部は稜を持ち外傾し、更に稜を持って立ち気味に外傾する。	水挽き整形、底部回転糸切り後、底部全面・体部回転糸削り、細砂粒・白色砂粒含む、灰色。	底部60%残 焼成良
須恵坏	13	底径 5.5	底部やや上げ底、体部は稜を持ち緩やかに内湾気味に立上がる。	水挽き整形、体部外面にろくろ目を残す、底部回転糸切り、細砂粒・石英片含む、淡灰色。	底部のみ残 焼成良
須恵坏	14	底径 5.6	底部平底状、器壁厚手、体部やや内湾気味に立上がる。高台厚く、端面丸く、不整形を呈する。	水挽き整形、体部外面にろくろ目を残す。底部回転糸切り、細・粗砂粒多い、暗灰色・粗雑なつくり。	底部60%残
須恵坏	15	底径 5.6	厚手、体部やや立ち気味に外傾して立上がる。底部分厚く、やや立ち気味に外反し、端部丸い。	水挽き整形、体部外面にややろくろ目を残す、高台接合部粘土もり上がる。細・粗砂粒・暗灰色。	底部38%残
須恵壺	16	底径 9.3	底部平底、体部稜を持って内湾気味に立上がる。高台は薄く、八字状に外反し、端部に稜を持ち、端面は凹面。やや内向する。	水挽き整形、体部外面にろくろ目を残す、底部回転糸切り、高台接合後周辺部横ナデ、細砂粒・白色砂粒含む・灰色・丁寧なつくり。	底部38%残
坏	17	口径 15.4	薄手、体部内湾気味に立上がり、口縁外傾して開き、端部をつまみ出す。	水挽き整形、ややろくろ目を残す。細・粗砂粒・胎土暗赤褐色・器面橙褐色。	口縁部11%残 焼成良
土師坏	18	口径 12.1	器壁分厚い、体部は鈍く稜を持って立上がり、口縁端部をややつま	内面・口縁部横ナデ、体部寛ナデツケ、器面磨減・淡橙褐色・軟質。	口縁部25%残
		底径 6.2			



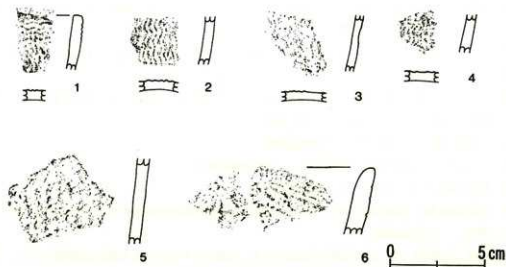
第61図 グリッド出土遺物実測図(2)ー2

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
埴	19	器高 3.7	み、急激に薄くなる。	水挽き整形、底部回転糸切り、高台接合後、周辺部丁寧に横ナデ、細砂粒多く砕片含む。淡灰褐色・外面黒色・半酸化炎焼成。	底部30%残
		底径 8.5	器壁やや厚い。体部は立ち気味に外傾する。高台やや高く端部で外反し、端面は丸い。		
須恵皿	20	口径 14.4 底径 5.9 器高 2.5	器壁やや薄い、平底の底部から、稜を持ち、緩やかに外傾し、内湾気味になり、口縁部外反し、端部をつまむ。	水挽き整形、底部回転糸切り、体部外面にろくろ目を強く残す。細、粗砂粒・濃灰色。	口縁部20%・ 底部50%残
須恵甕	21	口径 21.6	口縁部外反し、端部は大きく張り出し、端面は屈曲し、下端は外方へ張り出す。断面三角形を呈す。	巻き上げ、水挽き整形、細砂粒・白色砕片含む。内面淡灰色・外面灰色。口縁部内面に自然釉付着。	口縁部8%残 焼成良好
甕	22	口径 23.3	口縁部大きく外反し、端面は垂直状になり、下端は下向き、断面三角形を呈する。	巻き上げ・水挽き整形、細・粗砂粒・灰色。	口縁部10%残 焼成良好
甕	23	口径 28.6	肩部丸みをもって括れ、頸部短かく直立し、口縁部外反し、三角形状。	巻き上げ・水挽き整形・細砂粒・白色砕片含有・淡灰色・軟質。	口縁・肩部10%残
甕	24	口径 25.4 胴径 25.0	薄手、胴部やや張り、直立気味に内傾し、鋭く稜を持って短く屈曲し、口縁部外反し端部は鋭く張る。	巻き上げ・水挽き整形、ややろくろ目を残す。口縁部外面に筥による鋭い整形痕を残す。細・粗砂粒・胎土紫褐色 器面濃青灰色。	口縁・胴部8%残
甕	25		大型甕・口縁部は外傾する。端部はやや下端が突出する。	頸部に波状文を施す、巻き上げ、水挽き整形、細砂粒・胎土茶褐色・器面暗灰色・硬質。	口縁一部残
甕	26		大型甕・口縁部はやや外傾気味に外反し、下端がやや突出する。	頸部外面に二条・波状文を施す、巻き上げ、水挽き整形、細砂粒・胎土紫褐色・器面暗灰色・硬質。	口縁一部残
甕	27	頸部径22.5	大型甕・肩部は水平に近く内傾し、内面に稜を持ち屈曲し、頸部は外傾気味に直立する。	巻き上げ、水挽き整形、頸部外面に荒い横ナデ、肩部接合痕を残す。細砂粒・白色砕片が多い。濃灰色・断面紫褐色。	頸部20%残
甕	28	頸部径32.0	大型甕・肩部はふくらみ、内傾し、屈曲して頸部は外傾気味に立上がる。	巻き上げ、水挽き整形。頸部内面にろくろ目を残す。細砂粒・白色砕片が多い。肩部に接合痕を残す。暗灰色・断面淡紫褐色。	頸部14%残
甕	29	底径 14.4	体部は稜を持ち、外傾し、胴部は	巻き上げ、水挽き整形。胴部外面	底部・体部18



第62図 グリッド出土物実測図(2)―3

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵甕	30	底径 16.0	やや屈曲し、直立気味に立上る。 体部は外反気味に外傾して立上る。	一部に叩き目を残す。体部外面横篋削り。内面指頭押圧横ナデ痕を残す。細砂粒多い、暗灰褐色。	底部・体部18%残
甕	31	底径 17.8	器壁厚い。体部は丸みを持って直立気味に立上る。	巻き上げ、水挽き整形。体部外面回転篋削り、底部篋削り。細砂粒・白色砕片含む・灰色。	底部20%残
甕	32	底径 21.6	器壁厚い。体部は直立気味に外傾して立上る。	巻き上げ、水挽き整形。体部外面横篋ナデ、内面横ナデ、底部外面篋ナデツケ。細・粗砂粒多い。白色砕片含む、灰褐色・軟質。	底部23%残
甕	33	底径 15.8	器壁厚く、底部は周辺部で外傾し、稜を持って体部は、外反気味に外傾して立上る。	体部外面に平行叩き目が残る。接合部内面は荒い篋ナデを施す。細砂粒・胎土紫褐色・器表濃灰色。	底部12%残
須恵鉢	34	口径 28.3	胴部外傾して立上がり、やや括れて口縁短かく外反し、端部は鋭く張る。	底部周辺篋削り、体部は縦方向に篋ナデの後、横ナデ。内面は荒い横ナデを全面に施す。巻き上げ痕を所々に残す。細砂粒・暗灰色。	体部25%残
鉢	35	口径 28.6	胴になると思われる。胴上半部に把手が付き、直立に近く外傾し、口縁部で小さく外反し、端部外面に稜をもつ。	水挽き整形、内外面共、条のはっきりした横ナデ痕を残す。細砂粒・白色砂粒多い。濃青灰色・胎土・暗褐色。	口縁部8%残
羽釜	36	鈎部径23.3	胴部はほぼ直立し、鈎部の下でやや括れそのまま直立する。鈎は稜を持つ、断面四角形状を呈し端部は下降する。	外面荒い筥等による縦方向の整形の後、内外面を横ナデ、端部内面及び外面胴部に自然軸付着。細砂粒・白色砂粒多い。濃青灰色。	胴部のみ8%残
須恵壺	37	頸部径13.4 肩部径23.6	肩部は丸みを持って張り、水平に近く内傾し、頸部は稜を持って外反気味に立上る。	水挽き整形、外面は丁寧に横ナデを施す。頸部内面自然軸付着。細砂粒・暗灰色・内面煤付着。	肩部25%残
須恵壺	38	肩部径17.1	肩部は丸みを持ち、緩やかに内傾し、頸部へ続く。	水挽き整形、頸部との接合痕を内外面に残す。細・粗砂粒、白色砕片多い。灰色・軟質。	肩部40%残
磨石	39	長 9.6 幅 9.1 厚 3.0	扁平な自然石を利用、凸部の両肩の部分がやや磨滅する。	用途不明	花崗岩質
磨石	40	残長 17.5 残幅 13.0 厚 5.1	扁平な自然石を利用、平坦面を使用。	両面とも非常に良く使用され、平滑になって磨滅している。	花崗岩質



第63図 グリッド出土縄文式土器

グリッド出土縄文式土器（第63図）

縄文式土器は遺構確認時、住居跡覆土中より10点余り出土したが、いずれも細片が多い。早期押型土器と前期諸磯 η 式土器である。

以下一括して説明する。

第Ⅰ群土器（第63図1～4）

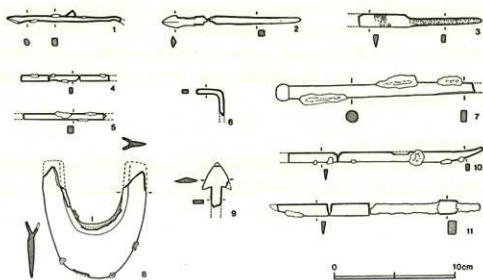
早期押型土器を一括する。すべて山形土器で、口縁部1点、胴部片3点出土している。1は角頭状の唯一の口縁部片、口唇直下より横位に1.5mmの条間に5条、口唇上にも一条施文されている。縦帯は横帯に接し、同一原体で施文されている。2～4は原体の単位は不明確であるが、縦位に施文され、2の条間は1mm、3・4は1.5mmとやや幅広である。器厚は6mm前後、胎土に多量の砂粒を含みザラつく。焼成は良好、茶褐色を呈する。

第Ⅱ群土器（第63図5・6）

前期諸磯 η 式である。1は原体R ℓ の縄文のみの深鉢片、2は波状口縁部片、RLの縄文を地文にもち、波頂部下に円形刺突、口縁に沿って平行沈線文が施文されている。胎土きめ細かく、内面は丁寧に磨かれている。焼成良好、茶褐色を呈する。

鉄器 (第64図・図版29)

- 1 残存長9.3cmを測り、細い基部は断面円形で、先端へ行くにつれ、断面四角形で太くなり、尖る。釘かと思われる。 1号住居跡覆土
- 2 鉈 一部破損して接合しないが、全長11.4cm程で、刃部で断面三角形、基部は四角形。状態は比較的良い。 1号住居跡
- 3 刀子 残存長10.1cmを測り、茎の部分は細い。状態は悪いが、全面に樹皮等の繊維質のものを巻いた痕跡が明瞭に残っている。 3号住居跡覆土
- 4 刀子の一部かと思われる。 7号住居跡覆土
- 5 刀子、もしくは鐵の茎かと思われる。 19号住居跡覆土
- 6 釘等の破片と思われる。 11号住居跡覆土
- 7 残存長16.5cm、基部は丸くなっており、先端方向で断面長方形を呈する。刀子にしてはやや大きい。不明。 5号住居跡覆土
- 8 鐮先 残存長9.1cm、幅8.3cmと小形品である。刃部はやや丸味のある断面三角形形状を呈し、木部をはめる部分は、大きく断面三角形形状に開く。 21号住居跡覆土
- 9 鐵 有茎平根式である。片面に稜を持つ様に厚くなっている。茎は断面四角形でやや扁平となる。残幅2.6cm、残長3.4cm、重量5.53g。 1号溝覆土
- 10 刀子 残存長16.2cm。錆が著しく進んでおり、基部の形状はややはっきりしない。刃部はやや薄く、良く使用されている。 11号住居跡覆土
- 11 刀子 残存長16.7cm、茎は断面四角形を呈し、身幅もあり、全体ががっちりしたつくりでやや大形のものと思われる。 2号溝覆土



第64図 沼下遺跡出土鉄器実測図

V 平原遺跡の発掘調査

1 遺跡の概観 (第3図参照)

平原遺跡は松久丘陵中の、諏訪山、山崎山の丘陵へ向かう、独立丘陵中にある。最高点は標高109mを測り、ここから丘陵は北西へ延び、更に高度を下げて支丘がやや北へ向かって分かれ、鞍部となって、やや高くなる、ほぼ平坦な部分に遺跡がある。同じ丘陵の浅い谷をはさんだ南東側の斜面部に沼下遺跡があり、又同じ丘陵の北西へ延びる支丘上に甘粕山遺跡群があった。

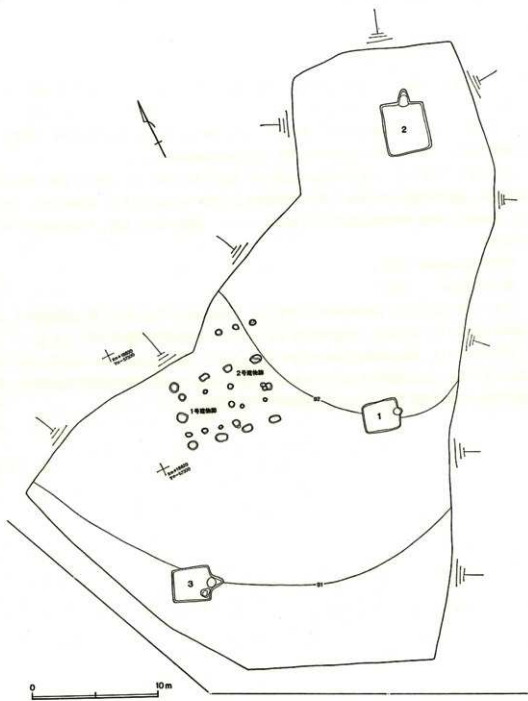
更に、狭い水田をはさんで北の諏訪山の丘陵の南へ延びる支丘の裾には、安光寺・北坂・清水谷遺跡がある。遺跡の標高は90~92mを測り、現水田面との比高差は16mであり、雑木林となっていたが、調査時には周囲の斜面部は削平されて崖となっていた。調査の結果、検出した遺構は次のとおりである。

平安時代の住居跡 3軒

堀立柱建物跡 2棟

遺構の状態は良かった。住居跡の竈の方向等から、二時期程度が考えられる。堀立柱建物跡は、遺物の出土がほとんどない為に、時期の決定はできないが、一応住居跡と同時期と考えられる。

集落の拡がりや、周辺の丘陵先端部が削平されている為、完全にはつかめなかったが、存在したとしても、数軒程度であったと思われる。以上の事から、本遺跡は沼下遺跡等とは異なり、集落の存在した期間も短く、極めて小さな集落であった様である。



第65図 平原遺跡全測図

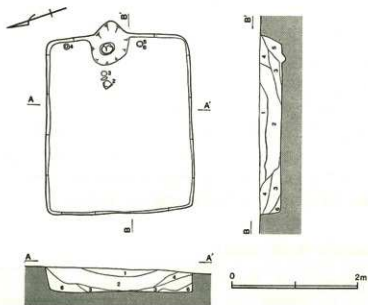
2 遺構と出土遺物

1号住居跡(第66図・図版32)

平原遺跡で検出された遺構中、中央部に位置する。主軸方位はN-100°-Eを指し、1号掘立柱建物跡と主軸をそろえる。本遺跡中最も小型で、規模は275×235cmを計る長方形を呈する。カマドは東壁北寄りに位置し、壁外に20cm程掘り込まれる。壁高は37cmを計り、一定している。立上がりはほぼ垂直となる。柱穴は検出されなかった。遺物はカマド付近に集中して検出され、第67図1の土師器甕がカマド中に倒立して出土している。その他土師器台付甕、回転糸切り後周辺部へラケズリ調整の須恵坏が、完形品で4点出土しており、うち3点に墨書が施されていた。

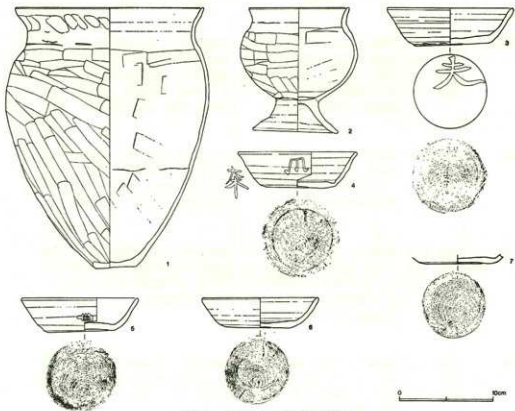
1号住居跡出土遺物(第67図・図版34)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 19.8 胴径 21.5 底径 4.3 器高 27.3	器壁は薄い。小さい底部から張り立上がり、肩部は丸味を持って張り、緩やかに内傾し、稜を持って括れ、頸部内傾気味に直立し、口縁部は外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部横ナデ後、肩部横削り。胴下半部縦削り。内面寛による丁寧な横方向ナデ、底部削り。胴下半部内面に接合痕を残す。口縁部に指頭痕を残す。細砂粒多い。肩部以下外面煤付着	90%残 No.1 橙褐色
台付甕	2	口径 10.5 胴径 12.5 脚部径 9.1 器高 13.0	体部やや丸みを持ち、外傾気味に立上がり、胴上半部で丸みをもって張り、内傾し、稜を持ち大きく括れ、口縁部直立気味に外反する。脚部厚く、力強く外反する。	口縁部横ナデ。胴上半部横削り。下半部斜め削り、内面削り、脚部横ナデ、頸部に輪積痕を残す。細砂粒・橙赤褐色、内外面あばた状に剥落。胴上半部煤付着	ほぼ充存 No.5
須恵坏	3	口径 13.2 底径 8.1 器高 3.9	器壁厚い。平底の底部から、緩やかに立上がり、外傾し、口縁部でつまみ、開き気味に外傾する。底部外面に墨書「夫」あり。	水挽き整形、体部外面にややろくろ目を残す。底部回転糸切り後、周辺部回転削り。橙褐色、底部外面に黒斑、内面あばた状に剥落	充存 No.4 焼成良好
坏	4	口径 12.5 底径 6.4 器高 3.8	底部厚く、平底状。体部大きくえぐられ、稜を持って外傾し立上がり、口縁部はやや外反気味になる。口縁部外面墨書「爪」・体部外面墨書「彩」あり。	水挽き整形、底部回転糸切り後、周辺部・体部回転削り、口縁部つまむ。細・粗砂粒・軟質。内面あばた状剝離顕著	充存 No.3
坏	5	口径 12.1 底径 7.4 器高 3.5	底部厚く、上げ底。体部は内湾気味に立上がり、外傾し、口縁部で薄くなり、端部は厚くなる。体部外面墨書「吉」あり。	水挽き整形。底部回転糸切り後、周辺部手持ち削り。細砂粒・石英質破片含む、内面・端部やや磨減	充存 焼成良



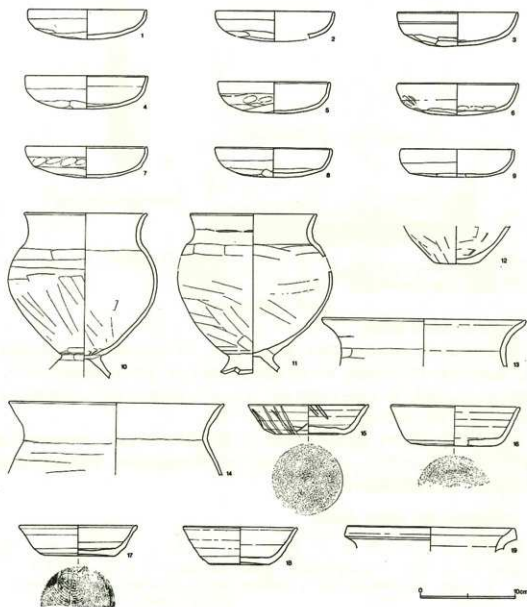
- | | |
|------------------|--------------|
| 1 暗褐色土 | 4 褐色土 |
| 2 暗褐色土 (ローム粒子混入) | 5 褐色土 (粘土含む) |
| 3 褐色土 (ローム粒子混入) | 6 明褐色土 |

第66図 1号住居跡実測図

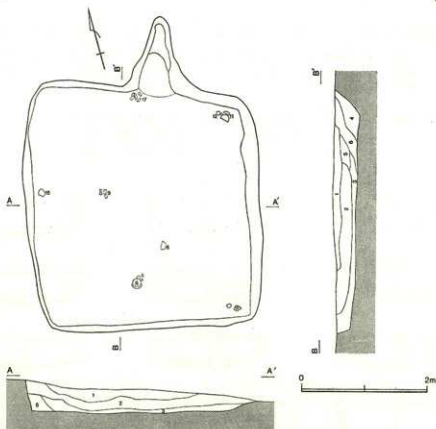


第67図 1号住居跡出土遺物実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	6	口径 12.1	底部厚く、平底状。体部内湾気味に立上がり、外傾し、端部はやや厚くなる。	水挽き整形。底部回転糸切り後、周辺部・体部回転笠削り、細・粗砂粒、淡灰色、軟質	完存 №2
		底径 6.9			
		器高 3.2			
坏	7	底径 6.7	底部やや上げ底。体部は稜を持って浅く立上がり、外傾する。	水挽き整形。底部回転糸切り後、周辺部・体部回転笠削り。細・粗砂粒・淡橙褐色・焼損じ	底部のみ残



第68図 2号住居跡出土遺物実測図



- | | |
|--------------------|---------------|
| 1 黒褐色土 | 4 茶褐色土（2より黒い） |
| 2 茶褐色土（ロームブロックを含む） | 5 暗褐色土 |
| 3 暗褐色土（ローム粒子を含む） | 6 黒褐色土 |

第69図 2号住居跡実測図

2号住居跡（第69図・図版33）

本遺跡で検出された3軒の竪穴住居跡中、最大規模を有し、プランは396×380cmのほぼ方形を呈する。主軸方位はN-19°-Eを指す。カマドは北壁東寄りに設けられ、壁外に110cm程掘り込まれる。壁高は40～45cmを計り、南・東壁でやや低くなる。立上がりは、ほぼ垂直であるが、東壁は攪乱のため一部不明瞭となる。柱穴は検出されなかった。

遺物量も本遺跡中最も多く、住居跡内より散出している。第68図5・7・8の土師器環が主軸上南壁寄りに重なって出土している。その他カマド中よりくの字口縁の土師器甕が、覆土中より長甕口縁部が出土している。墨書は検出されなかった。

2号住居跡出土遺物（第68図・図版34）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師環	1	口径 12.5 器高 3.2	やや丸みをもつ底部から、体部は内湾気味に立上がり、口縁部は直立する。	内面中央部窪ナデ。周辺部、口縁部横ナデ。体部外面窪ナデツケ、底部窪削り。細砂粒。淡茶褐色、あばた状の剝離あり。	口縁部25% 底部70%残 覆土

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師坏	2	口径 12.5 器高 3.2	やや丸みをもつ底部から、体部は内湾気味に立上がり、口縁部は直立する。	内面中央寛ナデ、周辺部・口縁部横ナデ。体部外面寛ナデツケ。底部寛削り。細砂粒・淡茶褐色	口縁・体部70%残、覆土No.5
坏	3	口径 12.7 器高 3.6	やや丸みをもつ底部から、鈍く稜を持ち、体部は内湾気味に立上がり、口縁部は直立する。	内面・口縁部横ナデ。体部ヘラナデ。底部寛削り。細砂粒・橙赤褐色	口縁部35%、底部40%残、覆土
坏	4	口径 13.0 器高 3.5	やや丸みをもつ底部から、鈍く稜を持ち内湾気味に立上がり、鈍く稜を持って口縁はやや内湾気味に直立する。	内面中央寛ナデ。周辺部・口縁部横ナデ。体部外面指ナデツケ。底部寛削り、細砂粒・橙褐色	口縁部一部欠失・ほぼ完存覆土
坏	5	口径 11.8 器高 3.3	かすかに丸味をもつ底部から、体部は内湾気味に立上がり、やや稜を持って口縁部は外反気味になり、端部は内側に稜を持って内傾。	内面中央寛ナデ。周辺部・口縁部横ナデ。体部外面指ナデ。底部寛削り。細砂粒・橙褐色	略完形No.4
坏	6	口径 12.7 器高 3.4	やや丸みをもつ扁平な底部から、体部は稜を持ち内湾気味に立上がり、口縁外傾し、端部で内湾する。	内面中央寛ナデ。周辺部・口縁部横ナデ。体部外面指ナデ。底部寛削り。細砂粒・橙褐色	口縁部 35% 底部 60%残
坏	7	口径 12.7 器高 3.3	やや丸みを持つ扁平な底部から稜を持ち、体部は内湾気味に立上がり、口縁部は内湾し、端部は丸く内面に稜を持つ。器壁は薄い。	底部内面寛ナデ。口縁部横ナデ。体部指ナデ。底部外面寛削り。細砂粒・橙褐色	略完形
坏	8	口径 12.2 器高 3.1	やや丸みを持つ扁平な底部から稜を持ち、体部は内湾気味に立上がり、口縁部で内湾し、端部内面に稜を持つ。	内面中央部寛ナデ。周辺部・口縁部横ナデ、体部寛ナデ、底部外面寛削り。細砂粒・淡茶褐色	口縁部 32% 欠失No.4
坏	9	口径 11.9 器高 3.0	扁平な底部から体部は稜を持ち、内湾気味に立上がり、口縁部は直立する。	内面中央部寛ナデ。周辺部・口縁部横ナデ、体部寛ナデ、底部外面寛削り。細砂粒・橙褐色	75%残No.2
土師台付甕	10	口径 12.9 胴径 15.9 底径 4.2	小さな底部から、体部は外傾し、胴部は丸味をもって張り、肩部は緩やかに内傾し、稜をもち、頸部は緩やかに括れ、口縁部は直立気味に外反する。脚部は稜を持ち、力強く外反する。	口縁部横ナデ、肩部外面横寛削り、体部縦寛削り、内面寛ナデ、脚部横ナデ、体部外面剥離著しい。細砂粒・暗橙褐色。口縁部・肩部に煤付着。	口縁部 75% 脚部 60%残 他完存No.3 甕袖
台付甕	11	口径 13.3 胴径 16.5 底径 4.7	小さな底部から、体部はやや内湾気味に立上がり、胴部は丸みをもって張り、肩部上で稜を持ち大きく括れ、頸部は立ち気味になり、口縁部直立気味にやや外反する。	口縁部横ナデ。肩部外面横寛削り、体部斜め寛削り、内面寛ナデ、脚部横ナデ。体部外面剥離。細砂粒・暗橙褐色。口縁部・胴部に煤付着。頸部に輪痕み痕を残す。	口縁部25%・ 肩部40%・ 胴下半30%残。 No.6、No.8
甕	12	底径 5.0	体部はやや稜を持って外傾気味に立上がる。	内面寛ナデ、外面剥落顯著、細砂粒・橙褐色・外面煤付着。	底部65%残 No.8

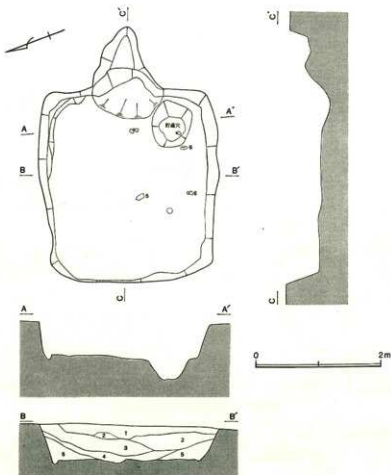
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	13	口径 21.5	肩部は張らず、やや内傾し、やや稜を持ち、頸部は内傾気味に直立し、口縁部外反して端部をつまみ上げる。	口縁部横ナデ、肩部外面横削り、内面寛ナデ。細砂粒・橙褐色。	口縁部13%残覆土
甕	14	口径 22.8	胴部丸みをもって張る。器壁薄い。肩部は丸みをもって内傾し、稜をもち、やや折れ、頸部は外傾気味に立ち、口縁部外反し、端部をつまむ。	口縁部横ナデ、肩部外面横削り、内面寛ナデ。細砂粒・橙褐色。	口縁部18%残甕
須恵坏	15	口径 12.7 底径 7.5 器高 3.1	底部やや上げ底、厚い。体部外傾し、稜を持ち、立ち気味に外傾し、やや折れて、端部をややつまむ。稜は鋭い。	水挽き整形。底部回転糸切り後、底部・体部回転削り。細砂粒・白色砕片含有、灰色。内外面に火だすきを有する。	口縁部 25% 欠失焼成良 №1
坏	16	口径 13.5 底径 9.0 器高 4.2	底部厚く、平底状。体部は丸みを持って立上がり、直線状に外傾し、端部はやや丸い。	水挽き整形。底部回転糸切り後、周辺部回転削り。細砂粒・白色砂粒含む。濃青灰色・底部赤味がかかる。	口縁部8%・ 底部32%残 覆土
坏	17	口径 12.3 底径 7.5 器高 3.2	器壁やや厚い。底部はやや上げ底。体部は鈍く稜を持ち、内湾気味に立上がり、外傾し、口縁部をつまみ、端部は厚味を帯びる。	水挽き整形。底部回転糸切り。細砂粒・白色砕片を含む。暗灰色、口縁部濃灰色。	53%残、焼成良 №3
坏	18	口径 12.0 底径 6.5 器高 3.9	器壁厚く、底部やや上げ底。体部は丸みを持って立上がり、外傾し、口縁部をつまむ。	水挽き整形。底部回転糸切り。口縁部外面にろくろ目を残す。細砂粒・白色砕片含む。黄褐色・淡橙褐色*軟質半還元炎焼成。	口縁部38%残 底部完存、
須恵甕	19	口径 17.6	頸部は直立し、口縁部は短く外反し、端部はやや張り、端面はやや上方を向く。	水挽き整形。細・粗砂粒多い。灰色・端面灰黒色。口縁端部上端磨減する。	口縁部のみ5%残

3号住居跡(第70図)

本遺跡中、最も南に位置し、主軸方位はN-119°-Eと1号住、1号掘立柱遺構とはほぼ同一方向を指す。規模は305×285cmの長方形である。カマドは東壁中央に位置し、壁外に95cm程掘り込まれている。壁高は58cmと深く、一定している。立上りはやや傾斜をもち、東壁隅より北壁にかけて一部周溝が検出された。また、東南コーナーに貯蔵穴を有し、内部より第71図2が出土している。6は回転糸切り後周辺部ヘラケズリ調整の須恵坏で底部に「土」あるいは「ぎ」の墨書がみられる。その他、土師器台付甕、坏、須恵器蓋、甕底部などが出土している。

3号住居跡出土遺物(第71図・図版35)

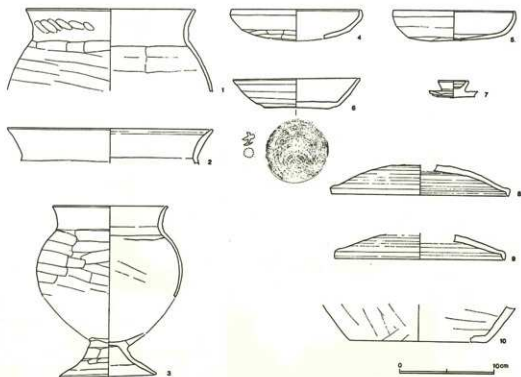
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 17.8	胴の丸い甕。肩部は張らず、丸みをもって内傾し、やや稜をもって折れ、頸部は直立し、口縁部立ち	口縁部横ナデ。肩部横削り。内面寛ナデ。削り時の寛痕が頸部との境に残る。細砂粒多い。橙褐色。	口縁・肩部50%残 №1、甕



- 1 黒褐色土（微量の炭化物を含む）
- 2 暗褐色土（ロームブロックを含む）
- 3 黒褐色土（ロームブロック・粒子を含む）
- 4 暗褐色土（ロームブロック・粒子を含む）
- 5 黒褐色土（炭化物ローム粒子を含む）

第70図 3号住居跡実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	2	口径 21.6	気味に外反する。器壁は薄い。 肩部は張らず、直立気味に内傾し、稜を持って括れ、口縁部肥厚して外反し、内面に段を持ち、端部で更に外反する。	色 口縁部横ナデ。肩部外面横寛削り、内面寛ナデ、細砂粒・茶褐色口縁部外面一部煤付着	口縁部13%残
台付甕	3	口径 12.0 胴径 15.3 裾部径 10.3	体部は外傾し、胴上半部で丸みを持って張り、肩部で内湾し、稜を持って括れ、口縁部立ち気味に外反し、端部をつまみ出し、丸い。脚部稜を持ち、力強く外反し、端部は外傾気味になる。	口縁部横ナデ。胴上半部横～斜め寛削り。内面寛ナデ、脚部横ナデ。口頸部との境に、削り時の崖痕を残す。脚部内面に底部との接合痕を残す。細砂粒・橙褐色	図上復元、上半部12%脚部70%残覆土・No.3・甕
坏	4	口径 13.6 器高 3.4	やや扁平な丸みを持つ底部から、体部は浅く外傾気味に立上がり、	内面中央寛ナデ。周辺部・口縁部横ナデ。体部外面寛ナデツケ。底	30%残覆土



第71図 3号住居跡出土遺物実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師坏	5	口径 12.7 器高 3.1	口縁部は稜を持ち、きつく内湾する。 扁平な底部から、体部は稜を持って立上がり、口縁部は内湾する。	部笥削り。内面少量の煤付着。細砂粒、橙褐色 内面中央笥ナデ。周辺部・口縁部横ナデ。体部外面笥ナデツケ。底部笥削り。体・底部外面薄く煤付着。内面あばた状に刺摩。細砂粒・橙褐色	45%残
須恵坏	6	口径 13.3 底径 7.1 器高 3.1	底部厚く、上げ底状。体部は屈曲して丸みを持って立上がり、浅く外傾し、口縁部をややつまむ。	水挽き整形。底部回転糸切り後、周辺部笥削り。細・粗砂粒、白色針状物質含む。淡灰色・口縁部外面一部暗灰色。墨書「土」底部外面	口縁部48%を欠く。 №3・4
須恵蓋	7	鈕径 3.2	鈕は薄く、高く、環状。頂部は凹む。	水挽き成形。細砂粒多い。暗灰色・胎土中間褐色	鈕部30%のみ残
蓋	8	口径 18.6	鈕部を欠く。頂部はやや丸みを持ち、稜を持ち、裾部は緩やかに閉き、端部は水平になり、屈曲し、先端は直立する。	水挽き整形。頂部回転笥削りの後、鈕接合時横ナデ。裾部にろくろ目を残す。細砂粒・白色針状物質含む。濃青灰色・端部黒色・自然釉付着 内面磨滅。転用硯	鈕部を欠く 15%残 焼成良好 産
蓋	9	口径 17.8	頂部はやや丸みを持ち、裾部は緩やかに閉き、端部やや丸みを持って屈曲し、先端は直立する。	水挽き整形、頂部回転笥削り。細砂粒・白色碎片・針状物質含有、灰色。やや軟質	裾部8%残 焼成良好 産

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵甕	10	底径 14.5	体部は外傾して立上がり、厚みを増す。	体部外面縦方向に削り調整。内面はナデ。底部回転削り調整。細砂粒。黒色・黒褐色	底部10%のみ残、焼成良好・堅緻

1号掘立柱建物跡(第73図・図版33)

2号掘立柱建物跡と重複する。P17がP8に切られており、前後関係が明らかとなった。棟行3間×桁行2間(4×3m)の東西棟建物。芯心間は桁行1.5m、棟行は南北で揃わず北側2m、南側両端は1.3m、中央1.2m。覆土はローム混り茶褐色土。P23、P24は付随すると思われるが性格は不明である。

No.	形態	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	No.	形態	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
P14	長方形	50 × 42	35	柱痕	P19	長方形	55 × 40	34	柱痕
P15	方形	36 × 35	30		P20	方形	35 × 30	25	
P16	円形	50	24	重複	P21	方形	30 × 28	20	
P17	(円形)	50	—		P22	方形	53 × 50	20	
P18	方形	40 × 35	33	P23、P24は不明。					

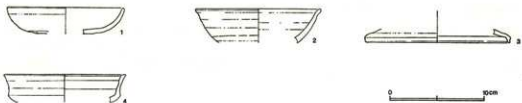
2号掘立柱建物跡(第73図・図版33)

1号掘立柱建物跡の後に建られる。長軸方位をやや北向きにし、N-97°-Eを指す。棟行3間×桁行2間(7×5m)。芯心間は250cm、ただし棟行間の中央の二本の間は200cmとやや狭くなる。P1、P2、P3は、一列のみ単独で検出された。

No.	形態	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	No.	形態	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
P4	方形	80 × 75	55	柱痕	P10	不整形	75 × 73	45	
P5	不整形	95 × 60	55		P11	長方形	95 × 67	40	
P6	方形	75 × 75	55	材	P12	長方形	85 × 65	40	
P7	長方形	85 × 78	40	重複	P13	長方形	85 × 66	45	
P8	楕円形	90 × 70	45		P1	方形	61 × 57	16	
P9	不整形	85 × 82	55	柱痕	P2	楕円形	58 × 53	20	
					P3	方形	85 × 66	20	

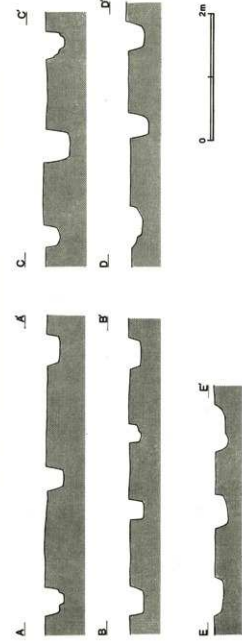
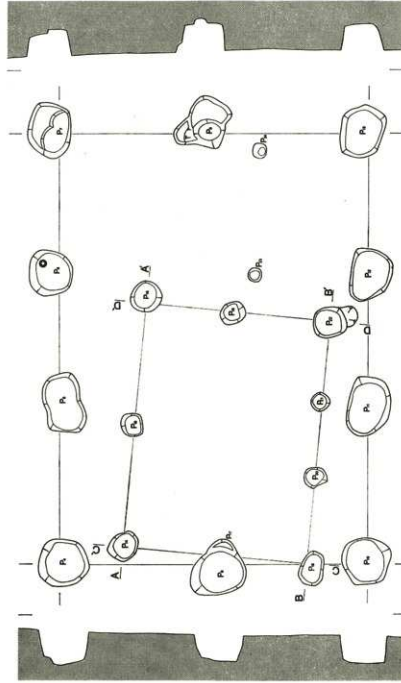
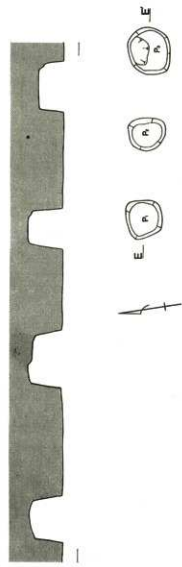
掘立柱建物跡・グリッド出土遺物(第72図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師環	1	口径 12.2 器高 2.8	扁平な底部から体部は内湾気味に緩やかに立上がり、口縁部はそのまま直立する。	内面・口縁部横ナデ。底部削り。体部削りナデ。細砂粒・暗褐色	口縁部5%・底部20%残
須恵環	2	口径 13.0	体部は稜を持ち、内湾気味に立上がり、口縁部で外反する。	水挽き整形。周辺削り。細砂粒・石英質砕片含む。暗灰色	口縁部30%残
須恵蓋	3	口径 15.2	裾部は緩やかに開き、口縁部で屈曲して張り、先端は直立する。	水挽き整形。細砂粒・淡灰色。口縁部外面・内面濃灰色。軟質	口縁部7%残 掘立柱建物跡1



第72図 掘立柱建物跡・グリッド出土遺物実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	4	口径 12.9	体部は丸みを持って立上がり、轆を強く持って屈曲し、口縁部は直立気味に外反し、端部は張り、端面は水平。	水挽き整形。細・粗砂粒。暗灰色・胎土中間褐色	口縁部10%残 底部を欠く焼成良、掘立柱建物跡B



平原遺跡

第73圖 平原獨立柱建物跡實測圖

Ⅵ 中山遺跡の発掘調査

1 遺跡の概観

遺跡は寄居町の北方にあり、児玉郡美里村、大里郡岡部町に接し、複雑な境界を呈している。

この地域は寄居町末野や美里村円良田方面から発達した丘陵が平野部に張り出し、丘陵から平地へ移行する変換点でもあり、細かく枝状に伸びた丘陵が変化に富んだ地形を形成している。

遺跡はこの一群の丘陵中にあり、寄居と美里にまたがる甘粕山丘陵の一角である寄居町中山に位置している。

同丘陵中には、瓦塔を出土した東山遺跡を始めとして縄文時代から中世に至るまで各期の遺跡が確認されている。

丘陵は高所に於いて標高100m前後で連なっているが、水田との比高は約22m程である。

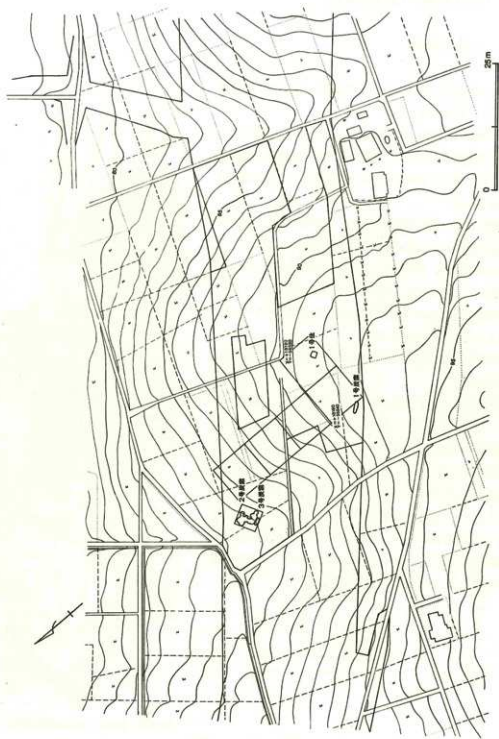
関越自動車道の路線は尾根を縦断する様な形で丘陵の北側斜面を通る。

当地は県下でも代表的養蚕地帯であるため、丘陵はほとんどが桑園を主体として若干の野菜畑がみられる。

遺跡の立地条件から北斜面のため、地表観察では調査結果が示すとおり、土器の散布は認められない、だが南側や頂部付近では相当数の土器片が確認され、その量や比率からはほとんどが奈良、平安時代のもので、周辺の丘陵の集落遺跡と同じ傾向がうかがえる。又畑地となっている丘陵は比較的表土が浅く、このため開墾によってかなりの数の遺跡が破壊を受けていることが予想される。



第74図 中井丘・中山遺跡地形図



第75圖 中山遺跡全測圖

2 遺構と出土遺物

1号住居跡(第76図・図版37)

丘陵頂部付近標高91~92mの間にあり東西する斜面に位置する。

遺構はロームを浅く掘り込んだ竪穴式住居跡の形態を呈する小規模のもので、平面形はややふくらみを有する隅丸方形となる。3.05×2.9mでローム面からの掘り込は浅く約15cm前後で北東の壁にカマドを設置している。

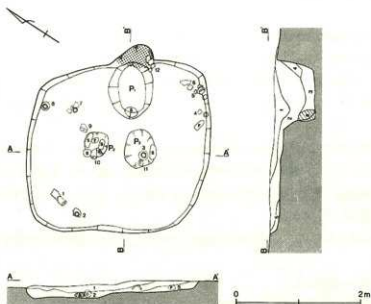
カマド前面焚口付近には75×95cm、深さ63cmのピットが掘られており、内部は特に熱を受けた跡は見られなかった。さらに、住居内のほぼ中央にすり鉢状に浅く掘られた2個のピットがある。規模は40×40cm、55×65cmで中よりフイゴの羽口が集中して出土し、又大きいピット内からは、フイゴや石に混り土器も出土している。

当住居跡からはこれら羽口と共に鉄滓も出土していることから工房跡的な性格を有する遺構と考えられる。

主軸はN-59°-Eを示す。

(1号住居跡出土遺物)(第77図・図版41・42)

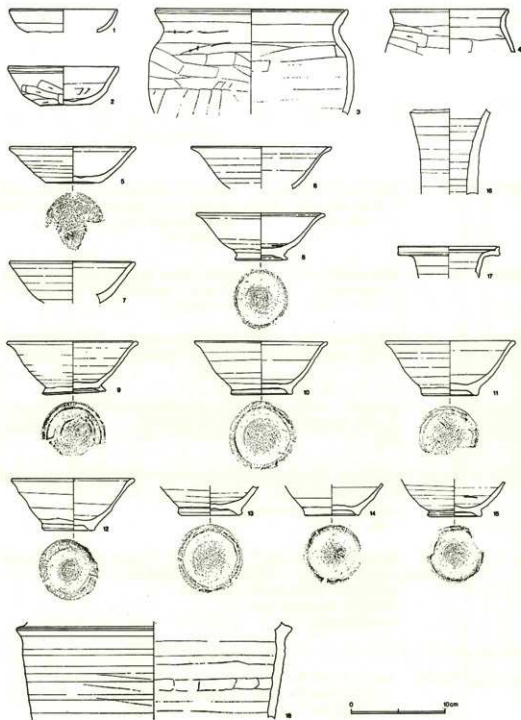
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器	1	口径 11.4	底部を欠失。口縁はゆるく開き薄い器内で小さく丸味をおびた口唇をつくる。口縁と体部の境に手法の相違による明瞭な差をみる。	口縁の外側は横ナデ、内側は平滑にナデ付けている。体部外側は指頭による整形、小破片である。	色調は赤褐色 胎土緻密、焼成良、完存率10%
坏	2	口径 11.7 器高 4.0	器面全体に凹凸がある。口縁は体部との境に大きく外反をみせる。底部にも調整の荒さから凹凸が生じている。ヘラケズリ調整による砂粒移動のため器面がさつく。	内側は全面にわたり横ナデ調整、外側は口唇部のみ横ナデ、体部はナデ付で、下半はヘラケズリ調整 底部もヘラケズリによる整形、完形品	口縁内面付近にスス付着、胎土良、焼成良、色調茶褐色
甕	3	口径 20.0	体部下半を欠失、頸部は大きくくびれながら口縁は外反する。肩部に張りみられず、なだらかに下る。	頸部には横位の強いナデ付痕が残り、肩部以下は横位のヘラケズリが施される。	色調明茶褐色 焼成良、完存率35%
台付甕	4	口径 12.0	頸部がくびれ、小さく開いた短い口縁が外反する。頸部に若干の厚味を持ち肩部以下なだらかに下る。	口縁は横ナデ、頸部以下は横位のヘラケズリ調整。小破片からの復元実測	胎土細かい 焼成良好
須恵器	5	口径 13.3 底径 6.5 器高 3.8	底部から直線的に開く体部を有し丸味を持った単純な口唇へとつながる。	底部の切り離しは回転糸切りで、焼成は土師質に焼け、胎土中に砂粒が混入する。	色調赤褐色、 完存率約50%
坏	6	口径 15.0	器内の薄いつくりで、ゆるやかに内薄しながら開く体部と、小さく(厚みを持って外反する口唇を持つ。)	ログロ成形で、器面に粘土カス様小塊が付着し、やや凹凸を感じる。	色調黄灰色 焼成良 完存率約30%



- 1 黒褐色土（炭化物を含む）
- 2 暗褐色土（炭化物を少量含む）
- 3 暗褐色土
- 4 黄褐色土（ロームブロックを含む）
- 5 黄褐色土

第76図 1号住居跡実測図

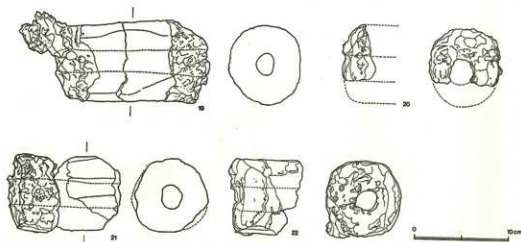
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	7	口径 13.4	器内の厚いつくりで、底部周辺が特に顕著である。底部を欠失する。	胎土は緻密であるが、中に大粒の砂粒が含まれる。焼成はやや軟質である。	色調灰褐色 完存率35%
高台坏	8	口径 13.8 底径 5.5 器高 5.0	体部下半に丸味を持ち、口縁はゆるやかに外反し、玉縁気味の口唇部となる。底部は厚く、低く開いた高台となる。	高台は小さく貼り付けで、ゆがみを生じている。水挽痕は明瞭ではない。内面に重ね焼きの痕跡が残る。	色調青灰色 完存率約70%
高台坏	9	口径 14.0 底径 6.8 器高 5.6	器体に水挽痕が良く残る。先端は小さく外反して玉縁となる。高台は小さく雑なつくりである。	水挽成形、底部は回転糸切痕が残り貼り付高台となる。胎土は細かい、一部土師質に焼成されている箇所あり。	色調灰褐色 焼成良 完存率30%
高台坏	10	口径 14.0 底径 6.8 器高 5.6	ロクロ水挽で挽き出された器体は先端で玉縁となって小さく外反する。外面には水挽痕の凹凸が良く残る。内面に部分的剝離がある。	底部には回転糸切痕が残り、高台は貼り付け。胎土は細かく、焼成は土師質となっている。	色調赤褐色 完存率80%



第77图 1号住居跡出土遺物実測図(1)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高台坏	11	口径 13.8 底径 6.0 器高 5.8	底部に厚味を有し、外面に水挽痕を残す。口縁は先端でわずかに外反し、玉縁の口唇となる。高台は鋭さを欠き丸味を有す。	底部に回転糸切痕を残し、高台は貼り付け。焼成はあまく、一部に土師質の所がある。	色調灰褐色 胎土は細かい 完存率約40%
高台坏	12	口径 13.2 底径 5.5 器高 5.7	器面に凹凸を残しながら直線的に開く、高台はくずれ小さく雑なつくり。	水挽で成形され、底部は回転糸切高台は貼り付けである。焼成はやや軟弱で器面に細かなヒビがみられる。	色調暗茶褐色、胎土細かい
高台坏	13	底径 6.8	体部上半を欠失、やや厚手のつくりである、高台は小さく丸味をもってハの字に開く。	底部はクロク回転糸切痕が残り、高台は貼り付け、焼成は土師質である。器面に炭素を吸着し黒色となる箇所あり。	色調暗茶褐色 胎土中に砂粒を含む
高台坏	14	底径 5.8	体部上半を欠失、小さく丸味を持った高台を有す。	底部には回転糸切痕が残り、貼り付け高台、一部土師質に焼成されている所あり。	色調・暗褐色 胎土細かい
高台坏	15	底径 5.8	体部上半を欠失、クロク水挽痕を良く残し、比較的器内はうすい。	底部に回転糸切痕を残し、高台は貼り付け、内面は黒褐色、外面は茶褐色	胎土は細かく 焼成良好
須恵器 長頸壺	16		頸部の破片、下部は器内厚く1.2cmを測る、内外面に水挽痕が良く残る。	胎土中に微・粗粒砂を含み、焼成はあまく軟質である。	色調明灰色 残存率約40%
長頸壺	17	口径 11.0	口縁部の破片、筒状の頸部から先端で大きく横に開く口縁は、口唇の断面三角となり、突出気味に立ち上る。	胎土細かく緻密である。焼成は良い。色調灰褐色	完存率約25%
羽釜	18	復元径約 28cm	胴部の破片。罎は断面三角状で1cm程の凸帯を貼り付けている。外面は目の荒いハケ状工具で横位のナデ付調整、内面に指頭によるナデは調整痕が残る。	焼成は土師質であるが硬く焼きしまり、胎土も精選されている。色調明褐色	完存率約10%
羽口	19	長さ21cm	径8.2×7.5cmを測る。孔径は2.3×1.8cm、両端には溶融した鉄滓が付着している。鉄滓の付着は先端部が著しく、基部は部分的な破損がみられる。胎土にはスサ等の植物質繊維が混入されている。色調は淡褐色を呈す。		
羽口	20	現存長3.5cm	先端に鉄滓の溶着した部分が残存している。推定径9.5cm、孔径2.5cmを測る。		

羽口	21	先端部のみ残存。現存長20cm。径8×7.5cm、孔径2.1×2.5cmを測る。胎土中には大粒の砂粒を含み、スサ等植物繊維の目が広く目立つ。熱を受けもろくずれ易い。
羽口	22	先端部のみ残存。現存長8cm、径8×8cm、孔径2.2×2.2cm やや不正円形となる。端部に鉄滓が厚く付着している。胎土ももろく、植物質繊維の跡がすき間となってめだつ。



第78図 1号住居跡出土遺物実測図(2)

1号炭焼窯 (第79図・図版38)

窯体は平面舟形を呈し、長さ6.8mを測る。幅は中央で1.8mとなり部分的に上面に攪乱を受けているが、最も幅の広い所は、上から1.2mの位置で推定2mとなる。

掘り込は浅く舟底状となり、ローム面から15~32cmで下部にしたがって浅くなる。

堆積土中に炭化物、ロームブロック等を混入し自然堆積を示す様に層の乱はみられない。壁、底ともさほど熱を受けた様子もなく、窯体に粘土等を使用した痕跡もみられず、素掘りのものである。

窯底は若干の勾配を持ち約4度平均を以ってゆるやかに傾斜する。

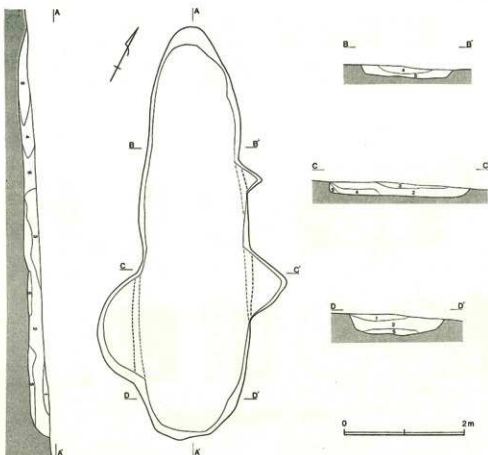
遺物の出土は無く、又周囲にも関連する施設、遺構は検出されなかった。主軸はN-27.5°-Wを示す。

2号炭焼窯 (第80図・図版38)

窯跡は地山のローム層を掘り込み、2基並列して構築されて主軸はN-33°-Eを示す。

窯は煙道焼成部、焚口、前庭部から成り、調査時すでに天井部は遺存していなかった。平面形は馬蹄形を呈し、床面中央部で最大幅1m20cm、全長2mを測り、最も遺存状態の良い奥壁部で高さ80cmとなる。

奥壁最下部には壁石に囲まれて19×16cmの排煙孔が設けられ、煙道を通じ外部へと続いている。



- | | |
|------------------------|------------------|
| 1 黒褐色土（炭化物を含む） | 5 黒色土（炭化物を多量に含む） |
| 2 暗褐色土（ロームブロック・炭化物を含む） | 6 暗褐色土 |
| 3 暗褐色土 | 7 黒褐色土（炭化物を含む） |
| 4 黒褐色土（炭化物を含む） | |

第79図 1号炭焼窯実測図

窯体は床に扁平な板石を敷き並べ、壁はやや厚味のある板石を立て、その上に同質の小形の石を小口積にして壁としている。奥壁では最上部の石がアーチ状に積まれており、これにしたがって天井もアーチ形となるものと推定される。

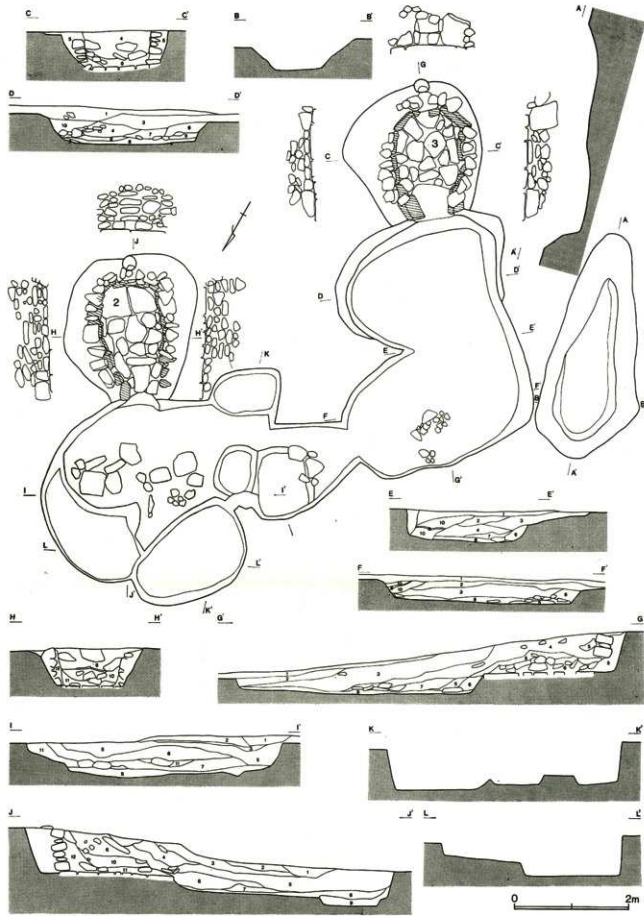
窯内からは天井石に使用されたと思われる石が落ち込んで混ざり、又前庭の作業場からもみられる。前庭部には楕円形の土壌が重複して連なり、3号窯跡の前庭とつながっている。

3号炭焼窯（第80図・図版39・40）

2号窯の西に並列しわずかに高位置にある。窯体は最大幅は中央で1 m 10 cm、長さ1 m 90 cmの平面馬蹄形となり奥壁で高さ70 cmを測る。

奥壁には床面に接し、四方を石で囲まれた13×20 cmの排煙孔を設け、煙道を通して窯尻から32 cmの所へ径25 cmの煙出しがある。

中山新築遺跡の地層断面図



- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1 黒色土 (浮石層混り) | 5 雑土 (焼土と焼けたロームを含む) |
| 2 茶褐色土 (浮石層混り) | 6 灰褐色土 (焼土ブロックを含む) |
| 3 茶褐色土 (焼土浮石層混り) | 7 灰褐色土 |
| 4 暗褐色土 (焼土混り) | 8 炭化物層 |
| 5 茶褐色土 (柱穴・焼土混り) | 9 黒褐色土 (焼土・炭化物・灰色粘土含む) |
| 6 赤茶褐色土 (焼土ブロックを多量に含む) | 10 茶褐色土 (焼土・砂混入) |
| 7 暗褐色土 (焼土ブロック・炭化物混り) | 11 赤褐色土 (焼土) |
| 8 黒色土 (炭化物) | 12 カルメラ状焼土 |
| 9 黒褐色土 (焼土・炭化物・灰色粘土含む) | |
| 10 茶褐色土 (焼土・砂混入) | |
| 11 赤褐色土 (焼土) | |
| 12 カルメラ状焼土 | |

竈は石を以て構築されており、壁は厚味のある片岩質の石を立て並べ、上部にやや小形の石を積んでいる。石やその隙間を埋める粘土の壁面及び床面は高熱を受けて、周辺まで幅広く熱の影響が及んでいる。

前面には大きく土塊状に掘り込まれた前庭部が広がり、槽円形の土壇2基が切り合った形で、一部は2号竈の前庭とつながっている。

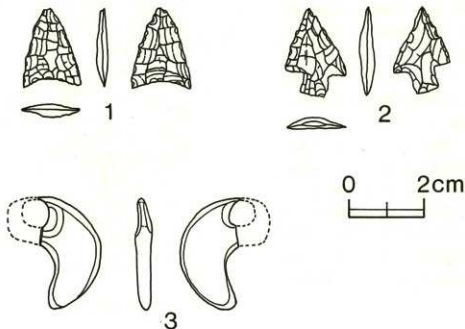
竈内にはくずれた壁石が、焼土ブロックとともに混入し、断面G—G'の第5層のごときは天井の崩落を想定される堆積の状態である。又前庭部内からは最下層に堆積する土には炭化物を混入した黒色土が全面にわたってみられた。

グリッド出土石器 (第84図)

本遺跡からは遺構確認時に、無茎・有茎の石鏃各1点と勾玉1点が出土している。1は先端部を一部欠損しているが、細かな剝離が加えられ丁寧に仕上げられている。2は全体に粗い剝離が加えられ、茎部も雑に作り出されている。勾玉は頭部を欠き、両面とも丁寧に磨かれている。

石器一覧表

器種	番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	えぐり(mm)	角度(度)	重さ(g)	石 材	出土地点	備 考
石 鏃	1	20	15	3	1.5	48°	0.78	チャート	表 探	先端部欠損
"	2	23.5	16	3.5	茎部 5	57°	0.65	チャート	"	完 形
勾 玉	3	29.5	12.5	4	—	—	3.53	蛇紋岩	"	頭部欠損



第84図 中山グリッド出土石器実測図

VII お金塚遺跡の発掘調査

1 遺跡の概観

「お金塚」遺跡は、市野川と荒川に注ぐ吉野川とに挟まれた江南台地最西端部にある台地の北斜面に所在する。鶴巻遺跡より南東へ約2.5kmの距離にある。

「お金塚」の名の由来は判然としないが、当塚のある寄居町鷹巣地区の人が通称していたものである。

今回の調査対象はお金塚であったが、調査前の現地調査でマウンド周辺に縄文式土器の細片が分布しており、該期の遺構の存在も想定して調査を開始した。

発掘調査は、お金塚マウンド中央に原点を設け、磁北を中心に2×2のグリッドを設定し実施した。マウンド部の調査が進むにつれ、マウンド盛土は旧表土である黒褐色土上に、黄褐色土(25cm)、茶褐色土(40cm)を盛土した比較的単純な土層を示し、古墳等の土層とは異なる事が判名した。マウンド周辺の調査では、マウンド裾に溝が周っている事が確認され、西側では一部二重に溝が周り、ある時期にマウンドが縮少された事が判名した。遺物は、マウンド頂部より鎌2本、盛土中より寛永通宝の破片、溝覆土中からカワラケが1点出土している。

また、調査時にはすでに移築されていたが、以前お金塚マウンド上には、明治12年銘の庚申塔が立てられており、一時期庚申信仰の対象になっていた事が窺える。



第82図 遺跡地形図

2 遺構と出土遺物

遺 構

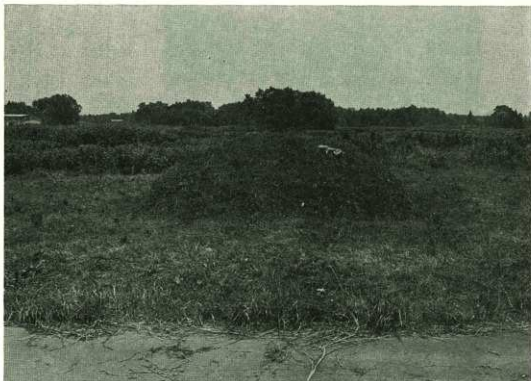
お金塚 (第83~85、88図)

お金塚は、最高標高92mの緩く傾斜しながら、東北へのびる台地の北側緩傾斜面に立地している。標高83m、見た目にもほぼ平坦であり、寄居町今市と西古里を結ぶ県道脇に面している。

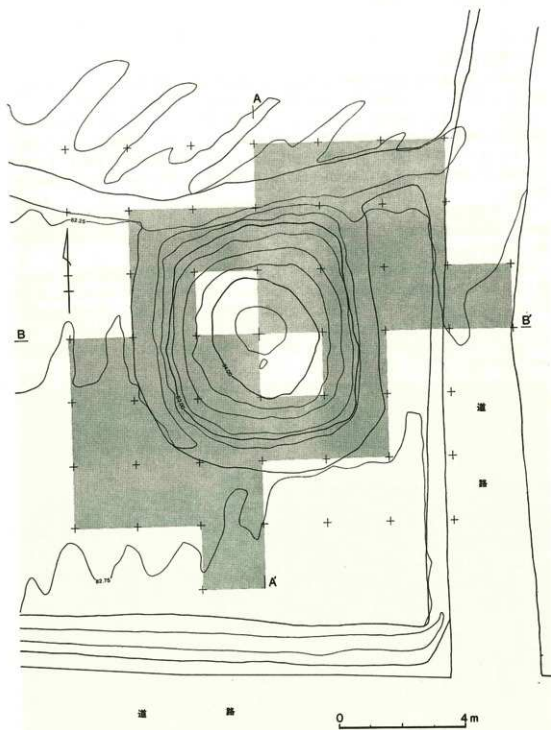
お金塚のマウンドは、当初円形と思われたが、コンタ測量の結果、マウンド頂部の標高84.55m、東西6.5m、南北7.7m、高さ1.8mの長方形を呈するものであった。マウンド頂部は、南北を長軸とする3.7×3.3mの長楕円形プランの平坦面が残り、82.75mのマウンド裾部まで急傾斜で下っている。頂部には、調査前に移築された明治12年銘の庚申塔(図版46)の基礎に使われていた円礫が残っていた。

マウンド構築方法は、旧表土である黒褐色土上に、ロームをブロック状に含む黄茶褐色土25cm、砂質の強い茶褐色土40cmの厚さに、一時期に積み上げたものと思われる。両土層とも踏み固めた様子も無く、調査中も足が幾分か沈む程に軟弱であった。

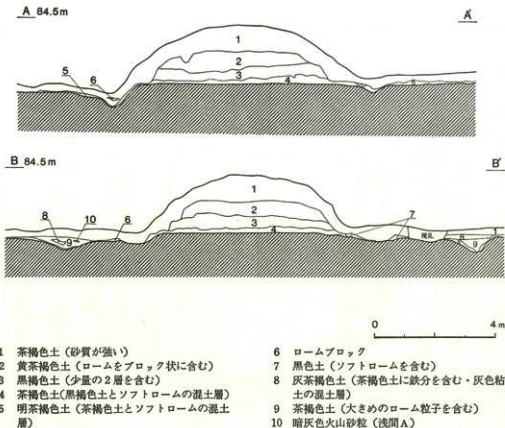
お金塚は、塚としては稀に全周する溝が検出され、特にマウンド西側では一部二重に巡っている。溝1及び3が構築当初の溝と思われ、幅1.2m、深さ0.3m、底部が一段掘り下げられている。溝1底面上よりカワラケが出土している。溝3は、地境の溝に兼用され、0.7mと深い。溝2は、調査時のマウンド裾より検出され、幅1.1m、深さ0.2mの浅い皿状を呈し、ある時期にマウンドが縮少された事を示している。構築当初のプランは、東西9.6m、南北6.3mで現況とは異なり、東西を長軸としていたと思われる。



お 金 塚 全 景 (南側より)



第83図 お金塚全測図



第84図 お金塚土層断面図

土壇 (第85図)

土壇1は、お金塚の東側に検出された。南北を長軸とする2.2×1.1m、深さ0.45mの隅丸長方形を呈している。ローム粒を含む茶褐色土を覆土にもち、遺物は皆無であった。

遺物

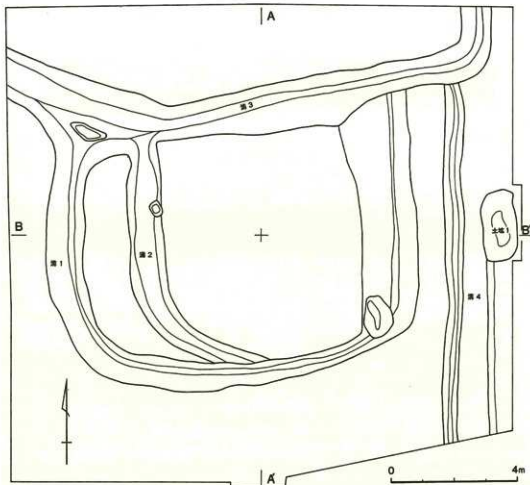
出土遺物は、お金塚頂部から鎌2点、マウンド盛土中より寛永通宝の破片、溝1底部よりカワラケ1点と非常に少ない。

鎌 (第86図1・2)

1は刃先を少し欠く小形の草刈鎌である。刃長15.2cm、背厚0.2cm、茎は7.5cm、身と茎の角度120°を測る。目釘孔は見られず、茎先端部を内側にL字形に折り曲げ、目釘孔と同じ役割を持たせている。2は錆も進み、身の中央がやや折れ曲がり保存状態は悪い。現存で刃長12.5cm、背厚0.4cm、茎7.2cm、身と茎の角度115°。目釘孔は見られず、茎先端の細い部分を丸く折り曲げている。

かわらけ (第86図3)

口径7.9cm、器高2.1cm、底径4.8cm、器厚0.6cm、口径が小さい割に肉厚である。体部はやや内湾し、口縁部は肥厚し外反する。体部内外面ともクロロ痕が顕著に見られ、底部は糸切り離しのままである。胎土は砂粒を多量に含み、焼成不良で赤褐色を呈している。



第85図 お金塚全測図

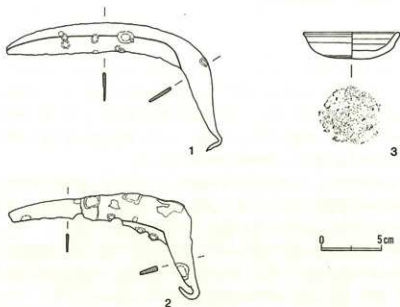
まとめ

前章でお金塚の立地・規模・形態・構築方法・遺物について述べてきたが、ここで簡単にまとめてみたい。

ここ数年の間に県内でも、単に盛土をしただけの「塚」の調査報告が、弁天山遺跡（野部1974）、根平遺跡（水村1980）、児沢遺跡（水村1980）、立野遺跡（今井1980）、物見山塚群（井上1980）、などいくつかなされている。これらの塚の特徴は、複数で群として存在し、塚に直接伴うと思われる付属施設・遺物が皆無に等しく、文献・伝承も残されていないことである。塚の性格としては、民間信仰上の構築によるもの、行人、道者の修行場または祭場、旗塚、地境などとあるが、現時点では、その成立時期、性格について何ら把握されていないのが現状である。

お金塚の特徴は、

- ① 単独で存在する。



第86図 お金塚出土遺物実測図

- ② ある時期に構築当初より規模が縮小されているが、溝が全周する。
- ③ 明確な長方形プランを呈する。
- ④ マウンド頂部に庚申塔が建立されていた。
- ⑤ 古銭、カラワケなどの遺物が出土している。

ことであり、これらの特徴が根平遺跡、物見山塚群などと大きく異なる点で、お金塚の性格を表わすものである。これらの特徴から、お金塚は構築当初より庚申塚として構築されたものかは不明であるが、天明期を下らない江戸時代に、民間信仰上の対象として構築されたものと思われる。

(今井 宏)

引用参考文献

- 井上尚明 「物見山塚群」こども動物自然公園内埋蔵文化財調査報告 埼玉県遺跡発掘調査報告書第24集 埼玉県教育委員会 1980
- 今井宏他 「児沢・立野・大塚原」日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財調査報告IV 埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集 埼玉県教育委員会 1980
- 野部徳秋 「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告III 埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会 1974
- 水村孝行 「根平」日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告III 埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 埼玉県教育委員会 1980